
地球を守りたい

田中由紀江 & U G M本部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球を守りたい

【Nコード】

N1215Q

【作者名】

田中由紀江&UGM本部

【あらすじ】

矢的猛・実はウルトラマン80・は、桜高という女子高に赴任することになった。その使命は、人間のマイナス・エネルギーの放出について研究するためであった。

第一章 桜咲く季節（前書き）

ちよつと変わった世界をつくってみました。

気に入っていただけるかどうかは、全然分かりませんが、
よろしくお願いします。

第一章 桜咲く季節

（プロローグ）

『地球を絶対に守りたいんだ。オレのこの手で……』

第一章 桜咲く季節

（やはり、人間の心から発されるマイナスエネルギーがこの世に充満している……）

新米教師、矢的猛は思わず吐息をついた。

彼が、この女子高、桜高に赴任することになってから、もう一ヶ月程度の月日が経つ。

何しろ、女の園である女子高に赴任する、と決まったときには、思わずニヤニヤ笑いをしてしまったりしたものだ。だが、現実にはやはり厳しく、年頃の生徒たちの相手をするのは、そう簡単なことではない。

「あの、矢的先生」

いきなり、後ろから声をかけられて、彼はぎくりとした。

「あ……」

後ろにいたのは、女性教師の山中さわ子だった。生徒たちには、さわちゃん先生、などと呼ばれて親しまれている。すらりとしたプロポーションの良いスタイルや、ドキッとしてしまうほどの美しい顔立ちで、男性教師たちの間でも密かな人気を誇っている女教師だった。

「山中先生、どうされました？」

「あの、実は、矢的先生のクラスの平沢さんのことなんですけど……」

「え？ 憂くんのことですか？」

猛は、いつも優等生の雰囲気を崩さない、ポニーテールの憂の顔を思い浮かべた。

何か、問題を起こしそうなタイプであるとは、少しも思えない。

「彼女は、とても真面目でいい生徒だと思っっていますが、彼女がどうかしましたか？」

「いえ、あの……、そういうことではなくて」

「さくわくちゃん」

気がつくと、職員室の戸口に、平沢唯が立っていた。いわずとされた、憂の姉である。

「平沢さんッ、勝手に職員室に入っちゃダメよ！」

いきなり、眉を上げてさわ子は怒った。

「だってえ、今日の軽音部のお楽しみ、とってもイイから、後で絶対来てって云いたくってえ」

「とにかくつ、外に出なさい！」

さわ子はそう唯を叱って、

「あ、矢的先生、またこの話は今度ということ……」

「え、ええ」

「失礼します」

そういうと、さわ子は、唯の後を追った。

(何なんだ……?)

まったく意味が分からずに頭をひねりながら、猛は女というのは不思議な生き物だ、となんとなく思った。

*

矢的猛 日常は、高校に勤める普通の一教師としての顔を見せているが、実は、彼はウルトラの星からやってきた、ウルトラマン80なのであった。

今回の彼の使命は、人間がマイナスエネルギーを放出する精神構

造についての研究をすることであり、それと怪獣出現との関係を調べるために、彼は、この桜高に赴任することになったのであった。それが女子高であるのは、たまたまの偶然なのか、それとも女のほうにマイナスの感情を発しやすい、と思われたからなのか？

猛は詳しい事は知らなかったが、とにかく、教師としてウルトラマン80であることを隠しながら人間の調査をしていくのに、この桜高はうってつけの場所であるとも思われた。

何しろ、学校であるから、たくさんの生徒たち　つまり人間が集まっているし、集団心理のようなものも研究しやすいそうである。

猛は、ポケットにしまっているマイナス・エネルギー計をソツと操作しながら、校庭に登校してくる生徒たちを、窓から眺めた。

今日は、何故か胸騒ぎのする日である。

何事も起こらなければよいが、何かが起こりそうな予感がしていた。

第一章 桜咲く季節（後書き）

続けられるかどうかは分かりませんが、
単なるウケ狙いの話しなのかも。

第二章 放課後の秘密（前書き）

やっと第二章ができました。

でも、エラーになったりして、なかなか投稿できません。

早く投稿して、この小説を待っている方に読んでいただきたいです。

第二章 放課後の秘密

第二章 放課後の秘密

放課後、担任である2年1組のホームルームを無事終了した矢的猛は、朝、山中さわ子が話そうとしていた内容について、何だか気になり、さわ子を探すことにした。

だが、さわ子が担当している3年2組のクラスに赴いても、そこにはもうさわ子の姿はなかった。

「あ、ちよつと」

猛は、そのとき視界に入った生徒の一人に思わず声をかけた。

「生徒会長の真鍋くんじゃないか」

「あら……」

猛に声をかけられた、生徒会長の真鍋和は、人なつこそうな丸い大きな眼をしばたいた。しっかりとしていることでは彼女は教師の間でも定評があり、赤い眼鏡ごしに光る瞳は、猛を少し値踏みしているようにも見えた。

「真鍋くん、山中先生はどこにいるか、知らないか？」

そばを通り過ぎる女生徒たちが、クスクスと笑っている。

猛自身は意識していないのだが、猛はこの女子高では唯一といってもいいぐらいの、若いイケメン教師であった。

何しろ、この桜が丘高校は年頃の女子たちの集団でもあり、猛とさわ子の仲を噂する生徒も多かった。

そのため、

（意外ねえ……、矢的先生のほうがさわちゃん追いまわしてんだ）

（そうだよねえ、てつきり反対かと思ってたのに……）

などと、二人の仲を邪推する生徒も多かったのである。

「えつと……あの」

周りの生徒たちの視線が痛いほど食い込むのを密かにもてあまし

ながら、猛は和に聞いた。

「どこにいるか、知らないかな？」

「心当たりはあります」

そう云って、和は、口もただけをほころばせた。

「この時間なら、多分、あそこだと思います」

*

「さわちゃんっ、美味しいでしょ、このケーキ」

「ホント、生きててよかった、って感じよね」

いつものように、紬の持ってきた高級ケーキを頬張りながら、さわ子も唯たち軽音部のメンバーとともにくつろいでいた。

「それにしてもっ」

と唯が云う。

「さわちゃんさあ、もしかして矢的先生のこと、好きになってたりしない？」

「まっさかあ」

と云いながら、さわ子は少し頬を赤らめる。

「確かにっ、矢的先生は、誠実だし、教師の鏡だし、とっても素敵だけど……、でも、きつと彼女とかもういるわよお」

「そうかなあ」

澪が、眉をあげて考えるように云った。

「ああいうタイプの男の人って、けっこう奥手で、まだ彼女なんて作ったこともなし、っていうんじゃない？」

「あ、そうかも。っていうか、矢的先生なんて、女から云いよってくるの待ってるタイプかもよ。そんな感じしないか？」

「そうねえ」

紬も、にっこりと笑って云う。

「でも、あの年齢で彼女いないっていうのも、ちょっとおかしいか

も……。もしかしたら、実はホモだったり……」

「ぷっ！」

思わず律が吹き出した。

「そうだったら、スゲキモだよ。矢的先生がまさかつ、ホモ……？！」

「ありえない、ありえない、あれは、スゲエすけべ、女好き間違いなしっっ！」

そのときトントン、と音楽室のドアがノックされた。

「はい」

と唯。

「あのお……」

と、おずおずと入ってきたのは、和だった。

「本人、連れてきちゃいましたけど……」

『え?!』

音楽室のなかがいきなり凍りつく。

和の後ろから頭をかきながら入ってきたのは、紛れもなくただいま噂的的眞っ最中であつた、矢的猛だった。

「酷いなあ、聞こえてましたよ。ホモだのスケベだのって……」

「い、いえ、あの……」

とどもりながら云いわけしようとする律。

彼女は、頭にヘアターバンをつけて前髪をあげており、猛の目から見てもとても活発そうに見える。

「あ、あわわ……」

ほとんど泡を吹きそうな唯。

唯は、科学の授業中、アルコールランプの火が消えない、と大騒ぎしていたことがあり、天然系のほわんとした少女であること、猛は覚えていた。

『うっっ……』

ほとんど目の焦点が定まっていない紬と漣。

漣は、確か、この軽音部のボーカルであることで名高く、校内に

ファンも多い。ちょっとしたアイドルである。また、紬は、良い家のお嬢様であるらしいという噂を聞いており、ここに置いてある高価そうなティーカップなどは、おそらく彼女が持ってきたものであると、猛はすぐに見当がついた。

「それに、山中先生まで混ぜてたなんて……」

「い、いえ、あの　これはっつ」

「あれ、しかもここで、ケーキ食べてたんですか？」

絶体絶命なさわ子！

しかし、そのときさわ子の脳裏を、先祖代々から受け継いできた忍びの心得（?!）のようなものがビリビリッと走り抜けた。

それは、どんな場面でもうまい具合に云い逃れして危機をくぐり抜ける、さわ子のなかの本能のようなもの　つまりは、適当に口八丁云い逃れ論術、とでもいうべきものだった。

「まさか……、この子たちが部活中にケーキを食べていたから、ちようど注意していたところですよ。　矢的先生も、いいところに来てくれましたわ、オホホホ」

『おいっ、さわちゃん……』

唯たち四人も青くなる……。こういうマズい状況になれば、いつもは物分かりのいいさわ子が簡単に相手方に敵として寝返ることが、充分に予測できたからであった。

ところが。

「山中先生、唇に生クリーム、ついてますよ」

猛は、あっさりとさわ子の嘘を見抜いたのであった。

「わあああんっ！」

いきなり、さわ子は泣きだした。

「ごめんなさいっ、矢的先生、嘘ついちゃって……。そういつつもりじゃなかったんですっ、私はっ……」

としやくりあげながら云う。

「今度は、泣き落としかよお」

とそれを横目で見ながら律が云った。

「教師って大変ね」
と紬。

「演技だろ、どうせ」
と冷静な澁。

すると、いきなり唯が何か決意したように立ちあがった。

「矢的先生！」

「は？」

「見なかったことにしてください！」

唯は、勇気を出すように、そう懇願した。

「放課後ティータイムは、私たちのバンド名でもあるし、部活動の命なんです。矢的先生なら、分かってくれますよね、ねっ？」

「そうですね、矢的先生！」
律も立ちあがった。

「山中先生は、私たちに付きあってくれて、本音でぶつかってくれ
る、いい先生だけなんです！　どうか、内緒にしてあげてください
い」

「……………」

「お願いします！」

「や、矢的先生……………」

ようやく泣きやんださわ子は、涙を浮かべて猛を見つめた。

「どうか、職員会で云ったりしないで、黙っててくださいませんか？」

私、放課後にこうしてお茶会するのが、もう心のオアシスで……………」

「女の子は、いくつになっても、ケーキが好きなものなんです！」

律が、大きな声で叫んだ。

思わず、猛は、その様子に微笑んでしまった。教師と生徒が、格
差をつくることなく対等な立場で信頼関係を結んでいる……………、教師
と生徒の秘密のお茶会、素晴らしいことではないか。

「わかったよ、皆。山中先生も、もう泣かないでください。ぼくは、
見なかったことにしときますから」

「やったあっ！」

「やっぱり、たけちゃんっ、話しわかるっ」

「た、たけちゃん……?」

猛は、思わず困惑する。

「律っ、変なあだなっけんなよ」

調子にのった律を濁がたしなめた。

「それにしても、山中先生が、こんなに面白い人だったとは……」

と猛は、顔をほころばせながら云った。

「私、いつもは、おしとやかで優しい先生を装っていますから」

「そんなの、必要ないんじゃないかな?」

と、猛はニツコリと笑った。

「猫を被ったりしなくても、山中先生は、そのままでもとても素敵
な先生ですよ」

「え?!」

さわ子は、いきなり赤くなった。

猛の言葉を誤解したからであつたが、そのとき、猛はそのことに
気づかずに話しを進めた。

「あ、そうだ。それよりも、今日の朝、憂くんのこと話があると
云つてましたよね。一体……」

「お姉ちゃん!」

その時、いきなり憂の声がして、猛は驚いた。

「あれ、憂くん、何故……」

「失礼します!」

音楽室に入つて来た憂と梓は、猛に頭を下げた。

自分のクラスの生徒だから、二人は毎日のように見ているはずだ
が、相変わらず二人ともとびきりの美少女だ。

憂は、いつも高めに結っているポニーテールがとても似合ってい
て笑顔も最高だし、梓は、丸い大きな瞳に白い肌、そして長い漆黒
の髪のコントラストが、思いきり愛らしい。

「お姉ちゃん、これ」

そう云つて、憂はギ 太のピックを差し出した。

「あれ？」

そう云って、唯は素っ頓狂な声をあげる。

「ピック、持ってきてなかったっけ？」

唯は、そう云って、自分のバッグを開けた。

「ええと……、ええと……」

「ピック、忘れてたのか？」

律は、驚いたような声を出した。

「あ、入ってない。ホント、忘れてたんだあ。

そんな唯を、梓が非難する目でジッと見た。

「唯先輩、練習する気が感じられません！」

すると、唯は、エヘヘ、と笑って、

「ごめん、あずにゃん」

「あ、あずにゃん？」

猛は、思わずそう口に出してしまった。

それは、梓がそう呼ばれたことが、ちょっと意外だったからである。

梓は、外見こそ可愛らしいが、クラスでは真面目いちばんで、成績も優秀であったし、クラスメートからもいろいろと信頼を集めるなど、どちらかというところ、少し大人びたような印象があった。

そんな梓が、『あずにゃん』、という可愛らしい愛称で呼ばれていたことに、猛はちよつと意外性を覚えたのである。

「はい、お姉ちゃん」

と、憂は、唯にギー太のピックを手渡した。

「ありがと。憂」

「うん」

と笑顔の憂。

彼女の姉思いな気持ちは、その笑顔から伝わってきて、猛は感心した。

すると、憂はすぐに猛のほうを振り返った。

「あ、矢的先生、何か？」

思わず、猛はとまどった。

「いや、違う。何でもないんだ」

「じゃあ、皆で、秘密を黙っててもらおうお礼に、新曲、U & I、行きますか」

と律が叫んだ。

「うんっ、行ってみよう！」

と、調子を合わせる唯。

「皆で、新曲を、先生のために演奏します」

絢が、ニッコリお嬢様らしく微笑んで猛に云うと、

「あ、ありがとう」

と猛は頭を下げた。

そして、その演奏は始まった。ボーカルは唯で、ドジっ子の彼女のイメージにそぐわず、なかなか素晴らしい声だった。

「……………」

それは、誰か大切な人への想いをつづったと思われる歌だった。

猛は、その曲を聞いて、思わず感動してしまった……

その曲は、高校生である軽音部のバンドの曲にしては、なかなかグツとくるメロディーでつくられていたのである。

アップテンポのノリのいい曲なのだが、そのメロディーによって、歌詞が生きていると感じられた。

「ぶっ……………」

曲が終わると、唯がそう吐息をついた。

「いやあ、素晴らしい演奏だったよ」

猛は、思わず心から拍手した。

「まさか、こんないい演奏がうちの高校の軽音部から聞けるとはな
あ」

「いいレベルっしょ？」

と律がハイテンションになる。

「やっぱ、軽音コンテスト、とか狙って、プロデビュー、夢は武道館?!」

「えへへ、私のボーカル、よかった？」

と唯が照れ笑いした。

「今日は、唯先輩のギター、とってもいい感じでしたね」と、梓がにこやかに云った。

すると、唯がいきなり梓に抱きついた。

「ありがと。あずにゃん」

と、頬をすりつける。

すると梓は、そんなことには慣れてるような様子で、可愛い口を少しとがらせた。

「やめてください。外部の人が見てるっていうのに……」

などと云いながらも、実はまんざらでもないような様子である。

近くにいた憂は、そんな二人の様子を、とても微笑ましそうに眺めていた。

「二人つて、ホントに仲がいいんですね」

猛も、その言葉に思わず微笑んで

しかし、猛は、そのとき、ハツとした。

それは、ポケットのなかのマイナス・エネルギー計が、わずかに反応したのに気づいたからだだった。

（この部屋のなかで、マイナス・エネルギーが発生している？ まさか……）

第二章 放課後の秘密（後書き）

どうでしたでしょうか？

楽しんでいただければ、幸いです。

第三章 静かな鏡（前書き）

遅くなってしまい、申し訳ありません。

それでも待っていてくれた方、ありがとうございます。

なるべく早く、アップしようとはいつも思っているのですが、
また、だいぶ遅くなってしまいました。

第三章 静かな鏡

第三章 静かな鏡

1

今日も猛は、放課後になると、軽音部へと向かう階段をあがっていった。

猛の姿を見ると、先にやってきていた律は、

「らっしゃい、猛ちゃん！」

などと云い、彼女らしい明るい笑顔を見せた。

唯は、向かいの机の椅子に座り、戸棚のなかに残っていたクツキ―を頬張りながら、じつと猛のほうを見つめている。

「矢的先生、また来たんだ。……どうして、そんなに毎日来るの？」

「え……？」

「もしかして、やっぱりさわちゃんのことが好きだったり……？」

「あ、いや、山中先生は、確かに素敵だけでも」

猛は、心中どうしたものか、と思った。この軽音部の部室である音楽室から、マイナス・エネルギーが発生していたことが気になつて などという本当の理由は、もちろん云えるはずがない。

「いや、あの……、僕は君たちの“U&I”だったっけ？ あの演奏に感動してね。あの時から、何だか毎日君たちの演奏を聞きたくなるんだ」

猛は、頭をかきながら照れたようにそう云ってみた。

すると、律は、

「じゃあ、猛ちゃん、もう私たちのファンの一人じゃん！」

と飛びあがって小躍りした。

「どうした？」

と澪と紘が部室に入ってくる。

「すっごく嬉しいこと、猛ちゃんが云ってくれた!」

「何て?」

「澪のことが好きだって」

「え……?」

「な、何を云ってるんだ」

猛は慌てた。

「そんなこと云ってないだろ?」

「猛ちゃん、私たちのバンドのファンなんでしょ? ってことは、

澪のファンだってことにもなるんじゃないかなあ」

「……………」

澪は、急に頬を赤く染めた。

「いや、あの……………」

猛は思わず狼狽する。

そんな猛を見て、律や紘はクスクスと笑っていた。

「猛ちゃんって、ほんっとおに、からかうと面白いよね」

律が笑った。

「若い男の先生で、真面目で純情な先生だと、からかいがあるなあ」

紘も、猛を見つめてニツコリと笑った。

「大体、矢的先生って、どんなタイプの女の人が好きなのかしら?」

「そうだよ、先生、おせーておせーて!」

「好きなタイプ……………」

考えながら猛は口ごもった。

ウルトラの星にはいつか恋した女性がいたが、地球上では、あまりそういうことには注意を払っていなかった。

地球にいるときの猛の任務は、この美しい蒼い地球を守ることであり、恋などにつかうつつを抜かしてられる気分ではなかったのである。

よしんば、地球上に好きな女性ができたとしても、この任務が終

われはウルトラの星に帰らなければならない。そのときの別れのツラさを考えたら、地球上で恋人をつくる気にはなれなかったのだ。

「どしたの？ 矢的先生」

長い猛の沈黙に、唯と律が、猛の顔をのぞきこむように見あげた。

「あ、いや……」

「悪いこと聞いちゃった？」

「いや、その……」

猛は、また口ごもる。

「いいよ、猛ちゃん、云わなくて」

唯が、つぶらな目をまんまるくして、猛を見上げながら云った。

「私たち、先生の趣味に口を突っ込むつもり、全然ないし」

「だよ、人それぞれだから」

そう云って、軽音部のメンバーたちは、クスクス笑いあっている。今の沈黙のせいで、「実はホモなのだ」などと誤解されているとは、さすがの猛も想像がつかなかった。

「あ、そんなことより、今日は、山中先生はいつ頃来るのかな」

「さわちゃん、今日は来ないんじゃない？ えっらく矢的先生の」と、意識してるみたいだし」

猛は、自分のクラスの憂のことについて、職員室でさわ子が何を云いたかったのか訊き出したいのだが、何故かさわ子は、自分が声をかけると逃げるようにどこかへ行ってしまうことが多い。

しかもその後、決まって周りの生徒たちからニヤニヤされたり、クスクス笑われたりしてしまうのである。

（一体、どうなっているんだろう）

そのたびにそう思いながらも、猛は次第に、憂のことについてさわ子に訊き出そうとすることを忘れてしまった。

しかし、そのことが後に強い後悔を生み出す結果になってしまおうとは、さすがの猛にもその時はまったく思いおよばなかったのである。

「わあっ、今日のお菓子は、いちごのタルトだあ」

紬の持ってきたケーキの箱の中を見て、軽音部の女生徒たちは歓声をあげた。

「こんなものしかなくって、悪いんだけど……」

紬は、ニツコリ、おっとりした笑みを浮かべる。

父親が大会社の社長だという紬の感覚は、一般人のそれとはちよつとずれていることが多かった。

「悪いだなんて、ぜんっぜん思わなくていいよ、ムギちゃん！」

唯は、瞳をキラキラと輝かせながら云った。

「ムギちゃんの家では、こんなケーキ、つままない駄菓子みたいなものかもしれないけど、私たちにとってはすっごい高級スイーツだから！」

「そう？」

おっとりと言き返す紬に、

「うん、そう」

「そうそう」

とメンバーたちは首を縦に振る。

猛は、そんな彼女たちの様子を微笑ましげに眺めていた。あまり甘いものが好みでない猛は、彼女たちのお茶会に参加することはしなかったが、いつも少し離れたところから、まるで守護神でもあるかのように彼女たちを見護っていた。

「いったただっきま〜す！」

唯が、いちごのタルトにフォークを入れる。

生クリームたっぷりのいちごを口に頬張って、彼女はふにゃんと顔をほころばせる。

「美味し〜〜！」

「美味しいなあ」

と同意する漣。

「美味しいわ」

と紬。

「うんうん」

とうなづく律。

いつのまにか来ていた梓も、

「美味しいですね」

と云った。

「唯先輩、唇に生クリームがついてますよ」

「うん、ありがとあずにゃん。これ食べ終わったら拭くね」

「……………」

梓は、猫のような丸い目をしばたたかせた。やれやれ、といった感じである。

律も、今日は彼女にしては珍しく、黙ってケーキに熱中していたが、そのうち、何かを思い出したらしくいきなり顔を上げた。

「そっだ……、そっいえば、さ」

「ん？」

唯は、ケーキの甘さに満足したようなふにやっとした顔で律を見た。

「最近、学校に幽霊が出るらしい、って噂、知ってる？」

「え？」

メンバー全員が凍りついた。

「幽霊？」

紬も聞き返す。

「りっちゃん、それってどんな噂？」

唯と紬は、興味深々といった様子で身を乗り出した。

「……………」

非常に怖がりである漣は、からだを両腕でぎゅっと抱きしめ、既

にがたがたと震えている。

「噂によると……」

そんな漣を意識して、律はわざとおどろおどろしく話そうとする。「部活が終わって、運動部が帰ろうとする頃になるとくく、薄暗くなった校内を、ぼうつと光る人影が、フラフラ、フラフラッてさまようんだって。しかもくく」

律は、漣の耳元に接近し、その耳に囁くように話す。

「とにかくくく、ぼうつと光る人影が、フラフラと校内をさまよい歩いて、そのうちくく」

「あわ、あわわ……」
ぶるぶる震える漣。

律は、わざと声を低くして漣の耳元でつよく云った。

「漣のことを、地獄につれていくぞくく！」

「ヒエヒエくく！」

しかし、漣は一方的にやられるばかりでなく、いきなり立ちあがって律の頭をぱこんとぶつ叩いた。

「いい加減にしろっ！」

「あいたた……」

頭を押さえながらも、律はにやにやと笑っている。

しかし、猛は、その話に少しひっかかるものを感じた。

「今の話のことだけ……」

猛は、見護るだけであった立場をやめて、沈黙を破った。

「へ？」

律は、近づいてきた猛を片目で見上げた。

「その噂ってのは、本当なのかな？」

「えくく、矢的先生、学校の怪談に興味あるの？」

唯が突っ込む。

「ん？ まあ、そういう噂があるなら、詳しく知っておきたい、と思ってるね。校内新聞をつくる时候にも役立つし」

「そっか。……うーん、云いだしたのは、うちのクラスのバレエ部の三花ちゃんだったかなあ……」

律は、思いだすように視線を上げて云った。

「校内が薄暗くなった夕方頃のこと、何度か、フラフラしている人影を見たって云ってたんだ」

「で……？」

「階段の踊り場にある鏡の前で消えたって話……」

「ばっからしい！」

「嘘じゃないよッ、見たっていう生徒たちがたくさんいるんだから

あ

「……………」

「あれ？ あずにゃん、どうしたの？」

「いえ、別に……………」

唯が見上げると、梓は目を伏せた。

「へんな噂も、あるもんですよね……………」

つぶやく梓を尻目に、律は元気よく声をあげた。

「まあいつか、どうせ軽音部には関係ないし　じゃあ、これから、新曲“U & I”の練習、いきますか！」

2

(何が、おかしい……………)

猛は、廊下を歩きながらそう思った。

一見、いつもと変わらぬ日常、そしてにぎやかで楽しい学校生活を送っているように見える生徒たちであったが、確かに、そのどこから、異様に思えるほどの強いマイナス・エネルギーが発散されている……………。

だが、その発信源は、未だに謎のままであった。

「さあ、みんな席について。ホームルームを始めるぞ」

猛が担任のクラスに入ってそう声をかけると、席を離れてグループで談笑していた女生徒たちが、わらわらと席に駆け戻った。

しかし

「ん？」

猛は、ホームルーム委員である梓がぼおつとして席に座っているのを見とがめた。

「どうしたんだ、中野。前に出てこないといけないだろ」

「あつ、はい」

梓は、いきなり我にかえった様子で黒板の前に立った。しかし、いつも聡明な彼女には似つかわしくもなく、何かに物おじしているようで、言葉さえいつものようにはつきりとは出てこない。

「えつと……、あの」

そんな梓を見かねて、猛は助け舟を出した。

「じゃあ、鈴木、中野といちばん仲良かったよな。今日は、中野と二人でホームルームを進めてくれ」

何かいつもと違う梓の様子が気にはなったものの、猛は、他のことに気をとられていた。

つまり、マイナス・エネルギーの発信源についてである。それは、この校内であることははっきりしているのに、何故か突き止められないのだった。

しかし、なるべく早く突き止めなければならない。

猛は、律の云っていたフラフラしていた人影というのが、そのことと関係があるのではないか、と思っていた。

放出されたマイナス・エネルギーが、人の形となって外部に害をなしていた、というような例が、確か昔にもあったような気がする。（これは、本格的に調査しなければならぬようだな……）

猛は、明日からは放課後の校内に夜まで残り、その怪しい人影とマイナス・エネルギーの発信源について、詳しく調査を進めよう、と思った。

ところが、である。

次の日、学校に行くと、職員室が騒がしくなっていた。教師たちが、顔をつきあわせて何か話しこんでいる。

「あの……、どうかしましたか？」

「あ、矢的先生……、いいところに来られましたね」

二年生の学年主任である、河口という女教師が、猛を見て云った。「実は、矢的先生のクラスの『中野梓』という生徒が、昨日、学校からの帰り道にバットを持った何者かに殴り殺されそうになったというんです」

「え……中野梓が？」

猛は驚いた。

「本人は、シヨツクのあまり部屋に閉じこもって、怖いので今日は学校へ行きたくないと言っていると、さっき母親から電話があったんですよ」

「……………」

「本当に、うちの生徒がそんな目にあうなんて、ゆゆしき事態だわ……………」

「矢的先生、黙ってないで、中野梓の母親に電話をかけておあげなさいな。母親のほうも、かなり精神的に参っているようですから」

「あ、はい」

猛は、考え込むのを打ち切ってそう返事すると、すぐに自分の机の上の受話器を取った。

住所録に書いてある番号をプッシュすると、呼び出し音が二回もならないうちに、すぐに梓の母親が電話に出た。

「もしもし」

「あ、梓クンのお母さんですか？ 担任の矢的ですが」

「あら先生、大変なんですよ、梓が」

梓の母親の声は、困惑のあまり既にうわずっていた。

「昨日、バットを持った暴漢に襲われてからというもの、何故か、部屋に閉じこもって全然出てこないんですの。きつと、よっぱど怖い思いをしたんですわ」

「ええ、聞いております。通学路でそんなことが起こるなんて、前代未聞のことですからね。ほくも心配しております」

すると、とても不安そうに、梓の母親は云った。

「先生、いえ、私もですね、梓のことがとても心配なんです。だって、もしこれで登校拒否でも起こされてしまったら……、やっぱり考えてしまいますものね」

「いえ、でも、梓クンに限って、そのようなことは……」

「こんなこと、初めてですよ。一体、どうしたらいいのか……、梓だったら、私を部屋のなかには全然入れてくれませんの……。それに御飯だって、あまり食べていないようだし……」

「はあ……」

猛は、こめかみに噴きでた汗を拭った。

声の調子からは上品そうな母親ではあるが、梓のことになると、酷く心配性のようにも思える。

「明日からは、学校に行ってもらえればいいんですけど……」

「大丈夫ですよ、梓クンは、とても真面目な生徒ですから、きっと明日からは学校に来るでしょう」

「でも……、分かりませんわ」

「それなら」

と、猛は、勇気づけるように云った。

「僕は担任ですから、明日からは学校に来られるよう、お宅まで梓クンを迎えに行ってもいいですし……、何なら今日、これからお宅へ伺って、明日は学校へ来るよう、梓クンの恐怖心が取れるまで説得させてもらいますよ」

そう云うと、母親の声が明るくなった。

「まあ、そこまでしてくださるなんて、さすが矢的先生ですわ。」

「どうか、是非お願い致します」

猛にしてみれば、梓は可愛い自分のクラスの生徒の一人である。

やはり、心配な気持ちは強い。

何者かに襲われたのだ、と聞いて、その心のトラウマのことまで心配だった。

これは、やはり家まで行ってやらねばなるまい。

郊外にある梓の家は、レンガづくりの趣きのある家だった。

由緒ある家なのだろう、出てきた母親は楚々とした美しい人だった。

「よく来てくださいましたわ、矢的先生」

「いえ……、それで、梓くんは？」

「こちらですわ」

梓の母親は、二階へと上がっていった。

木製の階段を上っていくと、白い洒落たドアに「あずさ」というネームプレートが下がっていた。

「梓、矢的先生がいらしたわよ」

母親の呼びかけに、応えはなかった。

「何をしてるの、梓」

「もう、帰ってもらって」

ドアの向こうから、梓の声が聞こえた。

「梓くん、自分を襲おうとした人物について、分かることがあったら、僕に詳しく話してくれないかな」

「……………」

ドアの向こうの声は押し黙った。

「どんな人物なのか、聞いておいて、他の生徒にも注意を呼びかけなければならぬし、警察に届けることも必要なことだと思うんだ」

「……………」

「一体、どんなヤツだった？ キミを襲おうとしたのは」

「警察なんかじゃ、多分、捕まえられない」

「え？」

「いや、捕まっただけじゃなくなんかない！」

それは、普段冷静な梓には似つかわしくないほどの激しさだった。捕まっただけじゃなくない？」

「……………」

ドアの中からは、すすり泣く声が聞こえた。

猛は、事態がつかめず、思わず頭をかきむしりたくなったが、ふと思ひあたり、彼はハッとした。

「もしかして……、キミを襲った人物は、キミがよく知っている人なのか？」

「……………」
すすり泣きは、まだ続けている。

「一体、誰なんだ、キミを襲ったヤツというのは」
「云いたくない」

梓は、そう云った。それは、誰にもくつがえせないような強い声だった。

「それは困るよ」
猛は、そう云った。

「僕にだけは云ってくれ。そうでないと、キミを守ってあげられないだろ？」

「……………」
「一体、誰なんだ？ 僕の知っているヤツか？」

「……………」
梓は、泣いているばかりだった。

猛は、これ以上梓に聞いてみても、無駄であることを悟った。

*

学校へ戻った猛は、事の詳細を校長へ話したが、事態を重く見た校長は、詳細が分かるまではこのことを伏せるように、と猛に命じた。

梓の様子から、梓を襲った人物が自分や梓と仲のよい人物である可能性が高い、と踏んだ猛は、その日も、軽音部へと向かう階段を上って行った。

音楽室のなかは、いつもどおり、ほのぼのとした楽しい雰囲気に含まれていた。

「あ、矢的先生」

唯が、猛を見てそう叫んだ。

「あずにゃん、今日来てないんだけど、知らない？」

「今日は、梓くんは休みだよ」

「えーっ、つまんないなあ」

唯は、心底寂しそうな顔をした。梓がいなければ、二人で合わせて演奏する部分のパートの練習が出来ないのだ。

「今日、しっかり練習しよう、って思ってたのに」

唯の声は、いつも明るい彼女には珍しく沈んでいた。

よほど、梓のことが大好きなのだろう、と猛は微笑ましく思いながらも、何とか彼女を慰めることはできないか、と考えた。

「そうだ、僕が、彼女のパートを弾いてあげるよ」

「え？ 矢的先生、ギター弾けるの？」

唯たちは素っ頓狂な声を上げた。

「弾けるさ。僕だつて、これでもギターくらいは」

「へえーっ、凄い、弾いてみて」

昔を思い出し、譜面を見ながら、猛は梓のパートを弾いた。腕は鈍っていたいなかった。

「凄い！」

唯は、その演奏の素晴らしさに飛びあがった。

「上手だよな、矢的先生」

「ホントッ、びっくり！」

メンバー全員が、驚きに目を丸くしている。

「ハハ、それほどでもないよ」

猛は、思わず照れてみせた。

「昔、けっこうやってたんだ、これでも」

「じゃあ、今日は、矢的先生も軽音部のメンバーとして、これから参加してもらいましょう」

律が、上機嫌な声をあげた。

「“放課後ティ タイム” & 矢的猛、のメンバーで、新曲、“U & I”の演奏です！」

「うん」

メンバー全員が、その提案に喜んで参加した。

演奏の最中猛は、軽音部のメンバーと一体となっていた。

こんな心地良い気分は、生まれて初めてのような気さえた。

少女たちの“放課後ティータイム”という名のこのバンドの曲が何故か聴く者を感動させるのは、おそらく、この少女たちが仲間で一体となるという、音楽をやるバンドとしていけば大切なものを持っているからなのだ、ということに猛は気づいたのだった。

音楽を仲間と奏でることの一体感、それは、素晴らしい気分をもたらす。

曲が終了したあと、思わず猛は、

「ありがとう」

と少女たちに言葉をかけた。

少女たちは、にっこりとほほ笑んだ。

「これで、猛ちゃんも軽音部の仲間だよ」

「ああ」

猛はうなづき、にっこりとした。

「今、最高の気分だよ」

「私たちも」

「猛ちゃんの演奏、すっごく良かったよ」

少女たちは、満面の笑顔を見せた。

この、少女たちの笑顔を自分が守らなければならない……。

猛は、心ひそかにそう思うのだった

*

その夜、宿直当番として、猛は学校にいた。

宿直室でテストの採点などを済ませると、やはり、昼間の梓の様子
子が気になった。

（一体、梓クンをバットで襲った人物というのは、誰なんだろう）
それを聞いても、梓はどうしても云いたくないようだった。結局、
彼女の顔すら見る事が出来なかったものの、やはり、あの押し殺
したような泣き声を思い出すと、猛は胸が痛んだ。

（校内をフラフラとさまよう人影。そして、梓を襲った人物、
それにマイナス・エネルギー。何か、関係があるのだろうか……）
猛は、複雑な思いになった。

無意識にため息をつき、昨日の出来事を確認するために学級日誌
を開いた。

そのとき。

「　　っ」

猛は、反射的にその攻撃を避けていた。ウルトラマン80として
の本能がそうさせたのだといってよかった。

おそらく、猛が普通の人間であったならば、簡単に敵の攻撃をく
らっていただろう。

「誰だっ！」

猛は叫んだ。

敵は、信じられないほど素早かった。猛が振り向くのとほぼ同時
ぐらいに、野球
のバットを持ったまま、ドアの外へ駆けだした。

「待てっ！」

猛は、その後を追う。

ウルトラマンの能力を持つ猛であっても、その人物を捕まえるの
は難しかった。

髪を上部にまとめたポニーテールを見ると、相手は女であるよう
だが、猛の足で

も追いつけないとは、何という逃げ足の速さだろう。

しばらく、無言の追いかけっこが続いた。

まるで、宙に浮いているかのように足音もなく、その敵は猛の前方を走りつづけ、

どんなに走ってもまったく疲れを感じないかのようであった。

(何て、脚の速い女なんだ)

猛がそう思っていると、いきなり女は二階へ上がる階段を駆けあがった。

猛も必死にその後を追う。

ところが。

「え？」

猛は、思わず呆然とした。

今階段を駆けあがったはずのその女の姿が、階段の踊り場あたりでいきなり消えてしまったのだ。

そこには、ただ大きな鏡がかかっているだけである。

「不思議だ……」

思わず、猛はひとりごちた。

鏡の前にしばらく立っていた猛であったが、仕方なく鏡に背を向けた。先程の出来事をいぶかしみながら、ゆっくりと階段を降りる。(確かに、ヤツはこの階段を上って行ったんだけどな……)

考えてみるが、手品のようなこの出来事について、やはり猛にはその種明かしが

分かるうはずもなかった。

と、そのとき。

「うわっ……！」

物凄い力で背中を押されて、猛は階段から転げ落ちた。おそらく、猛が普通の人間であったなら、頭からまっさかさまに落ちて、致命傷を負っていたかもしれない。

だが、猛は内臓しているウルトラマンの力を使い、自分のからだを地面からフツと浮かせた。そして、重力をコントロールし、自分のからだを立てなおした。

猛が後ろを見ると、やはりそこにいたのは先程の女であった。

しかし、その顔を見て猛は目をみはった。

「憂ケン！」

その相手は、憂の顔をしていた。

しかし、そうでありながら、あの明るく優しい憂の表情とはどことなく違う。

まるで、幽霊のようにうつろで暗い表情をしており、まるで冥土からやってきた死者のようであった。

そして、その暗い顔をした憂は、再び硬い表情のまま、階段の踊り場へ向かって駆けだした。

「待つんだ！」

猛もまた駆けだした。

しかし、彼は再び呆然とせざるを得なかった。

階段の踊り場へ上がると、そこには誰もいず、やはり大きな銀色に光る鏡だけが、静かに踊り場の壁にかかっているだけだったのである。

第三章 静かな鏡（後書き）

如何でしたでしょうか？

楽しんでいただけたなら、幸いに思います。

第四章 二人の憂（前書き）

憂ちゃんって、いつも笑顔で可愛いですよね。
そんな憂ちゃんが魔物に……？

第四章 二人の憂

第四章 二人の憂

1

チチチ……

校庭からは、小鳥がさえずる声が聞こえてくる。

一応布団のなかにはいたがとうとう一睡もできなかった矢的猛は、寝不足のために重い瞼をゆっくりとあげて、考え深げな表情になった。

(階段の踊り場でいなくなった憂。 あれは一体何だったのか……)

消えるように姿を消したあの少女は、間違いなく憂の顔をしていた。憂が、この事件の鍵を握っていることは間違いない。猛は、そう確信した。

(憂……、キミは、一体どんな秘密を持っているんだ?)

*

「おっはよ」

「おはよう」

「昨日のテレビでさあ……」

女子高の朝はにぎやかである。

登校してきた女生徒たちは、それぞれが仲のいい友人と一緒にになり、ぺちやくちゃとおしゃべりを始める。

そんな光景は見飽きている猛であったが、今日は自分のクラスの

なかを見まわして、何か異常がないかを探るような気持ちになっていた。憂に何か異変が起きているのだとすると、他の生徒にも、何かの異変が起きていないとは云い切れない。

そのとき。

「あ……」

思わず猛は声を上げた。

そこには、純と一緒に教室に入ってくる憂の姿があったのだ。

思わず、猛はそのそばに駆け寄った。

「憂くん！」

「え？ 矢的先生……」

意外にも、その態度はいつもの優等生の憂と少しも変わらない。

彼女は、いつものように穏やかな微笑みを浮かべて、しかし少しびっくりしたようにそばにいる猛の顔を見つめた。

「どうしたんですか？ 私に何か？」

「あ、いや……、その」

そんな猛を見て、クラスじゅうの生徒たちがワツと笑い出した。

「矢的先生、ストーリーカーするの、今度は憂に決めたんですかあ？」

「ス、ストーリーカー？」

猛は、驚いてそう繰り返した。

「だって、以前はさわちゃん先生のこと、すつごく追いかけてまわしてましたよねえ。次は、憂なの？」

「先生、いい加減に校内でストーリーカーするのやめて、外で彼女つくったらどうですかあ？」

「ホーント。生徒のことまでつけまわそうとするなんて、法律違反もいいところですよ！」

ドツと笑う生徒たちに囲まれて、猛はあつけにとられた。

よりにもよって、自分が聞きたいことがあってさわ子を探していたことや、事件を解決するために憂を待っていたことが、クラスの生徒たちにはストーリーカー行為である、などと誤解されていたのである。猛のショックは大きかった。

「先生、何とか云つてくださいよお！」

「現行犯でタイホしちゃうぞ！」

「ご、誤解だよ、キミたち……、僕は」

「いいんですって！」

クラスの女生徒たちは、皆クスクスと笑っている。

「矢的先生って、女性にはすつごく奥手ってカンジだから、ついストーカーしちゃうんですよねえ」

「わかるなあ、その気持ち」

「ストーカーでも、矢的先生って、素敵ですよお」

「だからっ、誤解だつて！」

猛は我に返つて、自分自身の名誉のためにも弁解した。

「僕は別に、さわ子先生や憂クンをストーカーしているんじゃないんだ。そうでは断じてない。それは誤解だよ」

「じゃあ、何のために朝っぱらから教室に張つてまで追い回しているんですかあ？」

その言葉に、またドツと笑いが起こる。

「理由は？」

「理由は……」

と云いかけて猛は思わず口ごもった。

「理由は……、えつと……」

昨夜、憂の姿をした暴漢に襲われかかったからだ、などと云えば、今度は憂がヘンな目で見られてしまうだろう。

「ちゃんとした理由、述べてくださいネ」

「矢的センス」

「えつと……うっん……」

「やっぱり、云えないじゃないですか。ストーカーはいけませんよ、先生」

「いや、違うんだ。実は、今日も休んでいる中野梓クンのことで、彼女と仲のいい憂クンにちょっと聞きたいことがあったんだよ」

「ホントですかあ？ 先生」

「何か、ウソくさいなあ……」

そういうながらも、生徒たちは猛を囲むのをやめ、自然にまた友達どうしでのおしゃべりに戻っていった。

クラスで生徒たちが団結するのは、結局、このように猛をからかったり、困らせようとするときだけなのである。

猛は、思わずため息をついた。

「先生？」

見ると、憂は、少し不安そうだった。

「梓ちゃん、どうかしたんですか？」

「いや、心配することはないよ。ただ、キミに聞きたいことがあるんだ」

「……………」

「昨夜は、ずっと家にいた？」

「あ、はい」

「外には出なかったのかな？」

「はい……、出ていません」

「もちろん、学校に来たりはしていないよね」

「はい、もちろんです。昨夜、どうかしたんですか？」

「いや、キミが心配することはないんだ……」

「……………梓ちゃん、今日も学校に来ないんですね。病気なら、早く治ればいいんだけど……………」

そう云う憂の顔は、本当に寂しそうで、まったく演技のようには見えなかった。

猛はその様子を見て、階段の踊り場で消えたもう一人の憂の存在を、おそらく彼女は何も知らないのだ、と心中ひそかに確信した。

そして、放課後。

猛は再び、部屋に閉じこもっている梓の家へ駆けつけた。

「梓くん、担任の矢的だけど、聞こえているかい？」
返事はない。

猛は、それでも仕方がないと思い、自室に閉じこもっているはずの梓に向かってまた話しかけた。

「帰宅する途中で、誰かにバットで殴られそうになった、とキミは云っていたね。その犯人、っていうのは、もしかして憂クンじゃないのかい？」

「どうしてそれを……」

部屋のなかから、梓の小さな声が聞こえた。

「やっぱり、そうなんだね」

ガチャリ、と扉の開く音がした。半開きになった扉のなかから、梓が白い愛らしい顔を見せた。

「どうして……、知っているんですか？」

「部屋に入ってもいいかい？」

「どうぞ」

猛は、初めて梓の自室に通された。

部屋のなかには、とても女の子らしい雰囲気だった。

白いレースのカーテンが窓辺を装飾し、フリルのついたピンクのカバーが、ソファやベッドにかかっている。

見慣れない女の子の部屋の部屋にちよつと戸惑いつつも、猛は部屋のなかに入り、梓の顔を見つめた。

「やはり、そうなんだね。キミは放課後、バットを持った憂クンに襲われたんだね。そうなんだね？」

「はい」

梓は、思ったよりも素直にそううなづいた。

気がつくのと、ちよつと見ないうちからだ全体が細くなり、少し青ざめたような梓の顔は、何かに怯えているような表情になってい

た。

「あの日……、おとといの放課後のことです。私は、バットを持った憂に、いきなり襲われたんです。本当に、いきなりのことです……、とっても恐ろしかったです……」

「僕は、ちよつと気になっっているんだけど……」
猛は云った。

「昨日、キミは『警察なんかじゃ捕まえられない』と云ってたね。それは、どうして？」

「それは……」

梓は、世にも恐ろしそうに云った。

「相手は……」

「え？」

「相手は、人間じゃないから」

「人間じゃない？」

「ええ、おそらく、魔物なんです」

梓の表情は真剣だった。猛は、息を飲んだ。

「魔物？」

「はい」

「どうしてそう思うの？」

「それは……」

梓は、少し顔をうつむかせ、心なしか、また小さく震えているように見えた。

「知ってること、全部僕に話してくれないかな」

「……」

「僕を信用してほしいんだ。絶対、悪いようにはしない。その相手は憂クンであって、憂クンではない。僕は、そのことを知っているんだ」

「え？」

「ぼくも昨夜、バットを持った憂クンに襲われた」

「矢的先生が？」

「そう」

「信じられない」

「しかも」

猛は、声を低めて云った。

「僕の場合は、夜中の学校のなかでだ。しかし、そのことを本物の憂クンは知らなかった。つまり、憂クンは、実は二人存在しているということになる」

「……………」

梓は、こっくりと深くうなづき、そして云った。

「その話を聞くと、矢的先生なら、もしかしたら分かってくれるかも。…………じゃあ、私、本当のことを話します」

「うん。必ず力になるよ」

そう云うと、梓は、ためらいがちに話し始めた。

「数週間前に、憂と純、そして私の三人で、この部屋でお泊まり会をしたときのことです。　パジャマパーティーをしているうちに、だんだん話が、学校の怪談のことになってきて……………」

梓は、いきなり考え込むように言葉を止めた。

「うん、それで…………？」

猛は先をうながした。

「純の発案で、肝試しとして、怖いって噂のある階段の踊り場まで行こうっていうことになったんです。…………学校の怪談で有名な、あの大鏡の前まで行って、噂が本当かどうか確かめようって…………。それで、三人で夜の学校に忍び込んだんです」

「女の子なのに、凄く勇気だね」

猛がそう云うと、梓は口もとだけで笑った。

「でも、大鏡の前まで来ても、結局のところ何も起こりませんでした。そのことに少しがっかりしながら、私たちは帰ろうとしました。…………大鏡に背を向けて帰ろうとしたとき、私、何となく気になって大鏡のほうを振り返ったんです……………」

そう云いながら、梓はいきなりとても恐ろしそうな顔になった。

「そ、そのとき、鏡に映った憂の顔が、こつちを見て怖いぐらい邪悪そうな顔になって……」

「邪悪そうな顔？」

「とつても怖い笑みを浮かべたんです……。何か、まるで魔物みたいな、とつても邪悪さを感じさせるような笑み……」

「でも、驚いて憂のほうを見たけど、全然憂は純と普通に話しながら笑っていて、そのときは気のせいかと……。でも」

梓は、おずおずと猛の顔を見た。

「その数日後、バットを持った憂に襲われたんです」

「でも、私、偶然よろけてしまって、バットの一撃をかわすことができたんです。そしたら、バットが近くにあつた窓ガラスにあたつて、割れて大きな音がして……」

「その音を聞きつけて誰かが駆けつける音がしました。そしたら」

そう云つて、梓はまたブルブルと震えだした。

「その憂が、窓ガラスのなかにスツと入り込んでしまったんです！」

「え?!」

猛は、思わず驚いて云つた。

「窓ガラスのなかに入り込んだ、だつて?!」

「はい……」

梓は、やはり小さく震えていた。

「私、学校の怪談は本当なんだつて、分かつたんです……。あれは人間じゃない。あんな魔物相手じゃあ、警察も歯が立たないつて。」

もしかしたら、憂ちゃんはある魔物の魔力に囚われているのかもしれない……。そう思つたら、凄く恐ろしかったんです」

「憂は、どうしてますか？」

「大丈夫だよ」

猛は、梓を安心させるように云った。

「彼女は、普段どおりだ。何も変わっていない。何も心配する必要はないよ」

「そうなんですな」

梓は、そういうと安堵の吐息をついた。

猛は、心中思った。

(おそらく、その鏡にひそむ者こそが、マイナス・エネルギーの発信源に違いない。これは、何とかしなければ……)

つぶらな瞳を瞬いて猛を見つめている梓に、猛は云った。

「もう大丈夫だよ、梓くん。僕は、今夜あの大鏡の所へ行ってみようと思う。魔物を退治したいんだ。そしたら、キミも何も

心配せずに元気に学校に来れるだろ？」

そう云うと、梓はこう云った。

「私も行きます！」

「え？」

「矢的先生だけに任せてはおけない。私も行かなくちゃ。そう

しなければならぬような気がするんです……」

「……………」

猛は、黙って梓の顔を見つめた。

決意したように、梓がゆっくりとうなづく。

猛は、今夜、とてつもないことが起こりそうな気がしてきた。

第四章 二人の憂（後書き）

にゃんにゃん。

読んでいただき、ありがとうございました。

第五章 邪悪な笑み（前書き）

お疲れ様です。

待っていてくれた方、ありがとうございます。

ついに、五話目になりました〜！

第五章 邪悪な笑み

第五章 邪悪な笑み

1

その夜

猛は、一人で学校のなかに忍び込んだ。

梓は何度も、自分も鏡のなかの憂を退治するのに同行したい、という思いを猛に伝えたのだったが、猛はまだ十代の梓のような女生徒を、正体のわからぬ魔物の出るところへ連れて行くなどやはり危険でとんでもないことだ、と思ったのだった。

そのため、梓がどんなに一緒に行きたがっても頑として受け付けず、猛はこう梓に云った。

「……キミは女の子だし、やっぱり夜に大鏡の所へ行くのは危ないと思うよ。敵の正体はどんなヤツなのか、まだ全然はつきりしていないのだから。何か起こったときにキミを守りきれぬ自信がないんだ。だから、一緒には連れていけない」

そういうと、梓は目に涙を溜めた。

「先生、私、大丈夫です。先生の足手まといにはなりませんから」

「キミがもう一人の憂クンを自分で倒したい、という気持ちは分かるよ。本物の憂クンを守りたいんだろ？ もしもう一人の憂クンが校内で悪いことをしてまわれれば、本物の憂クンに嫌疑がかかる。

それをキミは、何とか食い止めたんだね？」

そう云うと、梓は涙を溜めた目でこっくりとうなづいた。

猛は、そんな梓を可憐だと思ったが、しかし強い口調で云った。

「もう一人の憂クンのことは、必ずぼくが何とかするよ。だから」

らキミは、安心していい。このことは秘密にして、ぼくにまかせておいてほしいんだ」

そんな猛の言葉に、梓は黙ってうなづいたのだったが……

猛がそんなことを考えながら廊下を歩いていると、いきなり後ろから声をかける者があった。

「誰だ、こんな夜遅くまで校内にいるのは！」

それは、校内を見まわっている守衛さんだった。

「あ、ぼくです。矢的です」

猛は頭を下げた。

「ちよつと、忘れ物をしたので取りに行きたいのですが……」

「あ、矢的先生ですか」

守衛は、猛を見ると首をひねった。

「今日は忘れ物が多い日ですね。　　そういえば山中先生も、そう

云ってさっき向こうを通られましたよ」

「山中先生が？」

猛は驚いた。

「偶然、かな……？」

「どうかされましたか？」

「いえ、別に……」

猛はそう云うとにこやかに笑ってみせた。

「最近、忘れ物がはやっているのかもしれないよ。何しろ、暑いですからねえ」

「まあ、物忘れなんて誰にでもあるもんですからなあ」

にこやかに落ち着いてみせながら、猛は守衛と別れると足を速めた。

さわ子が校内にいる

もし、魔物の憂の餌食になってしまったら……、と思うと、ひどく心配だった。

(とにかく、大鏡の前へ行ってみよう)

猛はそう決めた。

そして、大鏡がかかっている中央の階段を上がっていくと、猛は驚いた。

「や、山中先生！」

そこには、何とさわ子が立っていたのである。

*

「あ、矢的先生……」

そう云って、さわ子は頬を赤らめた。

猛は、思わず険しい顔になった。

こんな時間にさわ子が大鏡の前にいるなど、おかしいとは思われない。もしかすると魔物が変化してさわ子になりすましているのではないかと疑ったのである。

「山中先生、何故、こんな夜にここにいるんですか？」

慎重な面持ちで、猛は訊いた。

「あ、あの……」

さわ子は恥ずかしそうに云う。

「実は、ある生徒から大事な相談があると頼まれて、この時間にここで待ち合わせてほしい、ということになったんです。ちよつと怖くて、嫌だったんですけど……、強い調子で断れなくて……」

「大事な相談？」

猛は、眉を寄せた。

「ある生徒、というのは誰ですか？」

「あ、あずにゃん見つけた！」

「にゃ！」

そのとき、階段の上のほうから唯と梓の声がして、猛はとても驚いた。

見ると、心なしか顔が赤い梓と、その梓に抱きついて頬ずりして

いる唯の姿があった。

それだけではない。

何と軽音部のメンバーたちが、そこに全員そろっていたのである。
「キ、キミたち……、こんな時間にどうして?!」

猛は面喰った。

「いいじゃん、猛ちゃん!」

律がにやにやと笑って云った。

「かたいこと云わないの! 猛ちゃん、今日宿直だっていうから、
ちよつと様子見に来てあげたんだからさあ」

「大体、どうして梓くんまで?! キミには来ないようにあれほど
云ってきかせただろう?」

猛がそう云うと、梓は小さな口をとがらせた。

「だって……、矢的先生には断られたけど、やっぱり家でじつとは
していられなかつたんです……。こっそり後をつけてきて、さ
わ子先生との会話に聞き耳を立ててたら、唯先輩に抱きつかれて、
思わず声を出してしまいました……」

梓はそういうと頭を下げた。

「ゴメンなさい!」

猛はため息をついた。

「でも、皆まで呼び付けることはないだろう?」

そう云うと、そばにいた漣が口を開いた。

「発案者は律。まったく、矢的先生のところ、今から行く
つてきかなくつてさ」

彼女はそう云うと、ぶんぶんと顔を横に振った。

「まったく、私は家で見たい番組があつたっていうのに!」

「……………?!」

猛はびっくりして律の顔を見た。

すると、律はニヤニヤしながら云った。

「猛ちゃんのためにサプライズ・イベント開いてあげようと楽しみに
してやってきたら、唯が急に梓がここにいると云ってかけだした

んだ。そしたら、梓が本当にいたんで、ホントびっくりしたよ」

「唯クン、何故梓クンがここにいることが分かったんだい？」

猛が訊くと、唯はいつものように元気いっぱいに答えた。

「それは『あずにゃん分』を感じたからだよ！」

「『あずにゃん分』って何？」

猛がまた尋ねると、

「栄養分とかみたいなの、私を元気にさせてくれる成分！」

そう唯が云った。

猛は、唯が『あずにゃん分』なる成分を感知する能力を持っているのか、と、あきれながらも少し感心した。

「『あずにゃん分』をずっと補給していなかったから、私、ちょっと元気なくしてた気がしたんだ」

そう云って、また唯は梓を抱きしめた。

「だから、『あずにゃん分』に飢えてた私は、あずにゃんを探すリーダーを働かせて、ここにあずにゃんがいるのを自然に感知したのであった……、なんてね！」

唯は上機嫌である。

猛はそんな唯たちに、疑問に思っていることを訊いてみた。

「大体、どこからキミたち、校内に入り込んだんだ？」

「ちゃんと、守衛さんに相談して、忘れ物があるって云ったら通してくれたよ」

律が云う。

「本当に忘れ物が多い日だ、って何かへんな顔してたけど」

「……………」

猛は、軽音部のメンバーの大胆な行動力に、やれやれと思わずため息をついた。

「それにしても、こんな夜遅くまで、校内に残るのはよくないぞ。」

もう皆、家に帰りなさい」

「教師風吹かさないでよ、猛ちゃん」

律がニヒヒという感じに笑った。

「だって、猛ちゃん、せっかく誕生日なのに、独りぼっちで宿直なんて可哀相だからわざわざ来てあげたんだからさあ」

「誕生日だって?!」

「猛は眉をしかめた。」

「だって、矢的先生、彼女もいなさそうだし……、誕生日にお祝いしてくれる人もなし、じゃ凄く悲しいですね」

「今まで黙っていた紬がいった。」

「彼女がいなくても、矢的先生に少しでも楽しく誕生日の夜を過ごしてもらいたいって、私たち思ったんです」

「もう、猛ちゃんも軽音部のメンバーだって皆認めてるし、誕生日くらい仲間同士で楽しく過ごしても、悪くないんじゃない?」

唯が言った。

「だって、そうじゃないとあまりに寂し……」

「そう云いかけた唯の口を嚙が押さえた。」

「バカ。あまりに寂しいなんて云うんじゃないよ。本人気づいてないかもしれないんだから!」

「……、いつものように元気にそんなやりとりをしている軽音部メンバーを見ながら、猛はひたひたとこみあげてきた不安に胸がしめつけられるのを、止めることができなかった。」

「おかしいな……、ぼくは今日、誕生日でも宿直でもないよ。」

「一体、誰がそんなデマを……」

すると、唯が口を開いた。

「え? だって、憂が今日そう云ってたよ!」

「憂くんが?!」

「うん、憂が今日、矢的先生は誕生日だけど宿直で、祝ってくれる人が誰もいないから、学校行ってお祝いしてあげなよって云うから、皆でこうやって集まって楽器演奏してあげようと思ったんだ」

「まあ、偶然ねえ」

「とさわ子も云った。」

「私にどうしても相談があると云ったのも、憂ちゃんなのよ」

「……………」

「あれ、先生、どうかしたの？」

唯が黙っている猛の顔に懐中電灯の光を向けてのぞきこんだ。

「……………」

「何か顔色青いよ？」

猛は、本当に頭から血の気がひいていくような感じがしていた。

(もしや、意図的に皆、ここに集められたのでは……………)

そして思わずハツとして鏡を振り返った猛は、異様なものを見た。

そこには、邪悪な笑みを浮かべた憂がうつっており、じつところを見つめていたのである。

「皆、逃げるんだっ！」

と猛は叫んだが、時すでに遅し。

鏡から無数に伸びてきた触手によって、一瞬のうちに全員鏡の中に引きずり込まれてしまったのだ……。

第五章 邪悪な笑み（後書き）

矢的猛と軽音部の皆、どうなりますことやら……。

第六章に続きます。

どろぞろ、よろしく……！

第六章 異次元の怪獣（前書き）

またまた、遅くなってしまう、申し訳ありません。

やっと、第六章の完成です！

どうぞ、楽しんで読んでやってくださいませ。

第六章 異次元の怪獣

第六章 異次元の怪獣

1

「…………クツ、あ…………」

猛が目を覚ますと、階段ではなく見慣れた教室のなかに倒れていました。

周囲には、さわ子や軽音部のメンバーが倒れている。そして、まだ彼女たちは皆、意識を失っていた。

「さわ子先生、唯クン、律クン…………、皆、しつかりするんだ！」

そう云って皆を助け起こしながら、ふと窓の外を見ると、見慣れた風景が異様な空間に変わっていた。

闇夜のなかに赤や黄のオーロラが輝き、絶えず稲光が走っている。これは、M78星雲で訓練生時代に習ったことがある異次元空間の風景だ、と猛は思いだした。

そのため、思わず猛は表情を厳しくせずにはいられなかった。

(そう云えば、故郷にいたとき、仲間から聞いたことがある…………。怪獣や宇宙人のなかには、鏡の中に異空間を作り出し、そこに巣くって犠牲者を引きずり込むタイプのものがあると…………)

おそらく、そうした異空間に引きずり込まれてしまったのに間違いない。猛は思わず焦り、80に変身しようかとも考えたが、もし変身しているときに他の皆が目覚ましてしまい、正体を知られるとM78星雲へ帰らなければならぬことを思い出し、躊躇した。

「うーん…………、きつツ、あれ？ 矢的先生…………、ここは？」

そうこうしているうちに、唯が初めに目を覚ました。

律、漣、梓、紬と、次々と目を覚まし、からだを起こす。

「うう　確か……、私たち、鏡の中に吸い込まれたんじゃないかなかっ
たか？　あれは、夢？」

「きつと、夢っしょ。　だって、ここ、私たちの教室のなかじゃ
ん？」

「そつよねえ……」

「夢じゃないです！　あれを見てください！」

梓が窓の外を指差した。

律も滲も、そして紬も外の風景を見てとても驚いた。

「……………」

「な、何だろう……、こんなの初めて見るぞ」

「真つ黒なもやもやしたなかに、オーロラみたいなのが見える……」

「街並みが、全然見えないなんておかしいわ。実は、消滅してたり

……………」

三人は、窓の近くに寄っていき、じつと外を見つめた。

「きつと異次元空間ですよ、ここは！」

梓の黒い瞳が、今は不安げに揺れている。

「どうします？　どうやって抜け出せばいいんでしょう」

猛は云った。

「おそらく、鏡の中の異次元空間に放り込まれたんだろう。これが
何が起こるかわからないから、油断は禁物だ」

「　　っていうか、私たち、生きて帰れるのかしら」

紬が心細そうに云った。

「生きてって……」

律が泣きそうな表情になる。

「それって、外の世界に生きて帰れないかも、ってこと?!」

「　　大丈夫だよ。生きて帰れる可能性は、充分にあるから」

「何で、猛ちゃんにそんなことがわかるの？」

律が、げげんそうな目で猛を見た。

「さつきから、猛ちゃん、何でもわかってるみたい言い方してる
けど、どうして、」

そんなことがわかるのさ。　　まるで、前にも異次元空間に来たことが
あるみたい」

「馬鹿だなあ、ないよ、そんなこと。　　こんなのは初めての経験
だ」

猛が、内心少し慌てて、苦笑しながらそう云うと、

「ホントに……？　　猛ちゃんって、もしかして　　」

「あたたた……」

その時さわ子が、片手で腰を押さえながら目を覚ました。

「もう……、最近、ツイてない……！」

そうさわ子は、駄々っ子のように云った。

「彼氏が出来ないだけじゃなく、こんな目にあうなんて……！　　も
うやだ……」

「あわわわ……」

怖がりの滲は、「生きて帰れないかも」というさっきの律の言葉
に過剰に反応したようだった。もう思わず泡を吹くぐらいに怯えて
いる。

ほとんど気絶する寸前のように、猛には見えた。

「さ、さわちゃん……、呑気なこと云ってる場合じゃないぞっ！

私たち、異次元空間に閉じ込められちゃったかもしれないんだから
な！」

それを聞くと、さわ子は、

「もう、教師なんて、辞める……」

と子供のように云いながら、涙をこぼした。

「泣かないの、さわちゃん」

唯がそう云って、母性本能を露わにしたような優しい微笑みを浮
かべた。

何故か、この絶対絶命のピンチのなかでも唯は取り乱さず、いつ
ものようにほんわかした雰囲気を保っていた。

「いい子、いい子、私が守ってあげるから……」

そう云って、さわ子の髪を撫でる。

「こんな困った状況のなかでも、唯先輩って、優しいんですね……。度胸がすわっているというか……」

そう梓が云うと、唯はいつものように梓に抱きついた。

「ピンチだから、あずにゃん分、補給しちやあつと」

そう云って、唯が梓の髪を撫でこ、撫でこした、その時

突如、そこに憂の姿が現れ、こう叫んだ。

「お姉ちゃんに、近づかないで！」

憂の表情は憎しみに満ち、さわ子や軽音部メンバー全員を睨みつけていた。

「憂ちゃん！」

さわ子たちは、突然の憂の出現に驚き、彼女の名を呼んだ。

「こんなところに、どうして憂ちゃんが？」

律が、そう憂に尋ねた。

「憂ちゃんも、鏡の中に連れ込まれたのか？」

澪は、憂の表情を覗き込むようにして云った。

「大丈夫だよ、憂。きっと、皆で一緒に帰れると思うし……」

梓がそう云っても、突然現れた憂はじつと下を向いて黙っていた。猛は叫んだ。

「皆、騙されるな！ この憂くんはにせものだ！」

「いいえ、本物ですよ」

そう云いながら、後ろの空間から、ニタリと邪悪な笑みを浮かべたもう一人の憂が現れた。

「私は、この少女の嫉妬の心から生まれたのです。つまり、肝

試しに夜中、大鏡の前に三人の少女たちがやってきたとき、迷惑そうな口調でも、ニコニコしながらその梓が、唯のことをずっと話

していた……。その時、憂の心の中に、どす黒い嫉妬の心が芽生えたのです……」

もう一人の憂は邪悪な表情で、そう云うとニタツと笑った。

「梓を襲って唯から引き離そうとしたのも、憂の意志を受けてやったこと……。つまり、憂の差し金なのです……」

もう一人の憂の言葉に、軽音部のメンバーたちは青くなり、思わず顔を見合わせた。

憂がそれほどまでに、自分たちを憎んでいたのかとひどく驚いたのである。

だが、その時、唯が叫んだ。

「そんなはず、ない！ 自慢の妹の憂は、そんな子じゃない！」

「お姉ちゃん……」

「そうだよ、違うって云って、憂！ 私の可愛い憂は、そんなことで友達を憎むような子じゃないよ。 いったって、優しく、微笑みを浮かべて、料理が上手で……、私なんかより、ずっと、ずっと、しっかりとっているんだから ！」

そう云いながら、唯は泣いていた。

「友達を傷つけるような、そんなこと、絶対しないんだから……！」
泣いている唯の肩を持ち、励ますように、猛は云った。

「ぼくもそう思う。 憂くんは、いったって本当に優しく、思いやりのある生徒だった。 困っている人がいたら、放っておけないような、そんな子だ。 決して友達を憎んだり、傷つけたりするような子じゃない」

「矢的先せ……」

唯は、激しく泣きながらしゃくりあげていた。

「おそらく憂くんは、少し淋しかったのかもしれない。 大好きなお姉さんが、軽音部という自分とは関係ない世界を持ってしまったことが……誰だって、大好きな家族が自分の他に大事なひと達や世界を持ってしまったら、それを喜びながらも、本心ではちょっとだけ、淋しいもんだ。 そのちょっとした心の隙に、魔物が乗じたんだろっ」

猛がそう云うと、彼女にしては珍しく、真面目な顔をして律が口を開いた。

「 そう云えば、私だって、前に遷が和と仲良くお弁当食べてたの見たとき、何だか嫉妬してしまったことがあった……。 あの時、

澪とは別のクラスだったし、だから、同じクラスの和と澪が仲良くしてても仕方なかったんだけど……、でも、何だか、和に澪を取られたような気持ちになって……」

律は、そう云うと本物の憂のほうを見た。

「私、憂ちゃんの気持ち、分かる気がする。憂ちゃんも、そうだよ。ね。唯が皆と仲良くしてるの見て、それに梓に抱きついたりしてたの見て、ちょっとだけ嫉妬しちゃったんだよね。……憂ちゃんが唯のこと、すっごく大好きなの、見てたらよく分かるもん。」

「いつつ、お姉ちゃん、温かいでしょ？」とか、唯のことばかり云ってるもんね。当然だよ、姉妹なんだから。大好きなお姉ちゃんとられたら、きつと誰だって、ちょっとぐらい嫉妬しちゃうよ。それは、仕方ないことだよ。」

「そうよ、私もそう思うわ。」

紬が云った。

「憂ちゃんが、そんな悪い子だなんて、全然思えないもの。」

「そうだよ、憂ちゃんは、そんな子じゃない！」

澪も云った。

「梓をバットで殴るように指示するなんてこと、絶対あるわけないよ。」

「私も、そう思います。」

最後に梓が云った。

「きつと、悪い魔物に操られたんです。憂が私を殺そうとするなんて、そんなことがあるわけありません！」

「憂……」

唯が、涙目でじつと憂を見つめながら、近づいた。

「本当の憂の心に戻って。お願いだから。また、憂のつくる御飯が食べたいよ。」

「お姉ちゃん……」

憂の目に、涙が光った。

それを見ながら、猛は思った。

やはり、もう一人の憂に、彼女は操られているのではないかと。本物の憂が覚醒しかけているのを知って焦ったもう一人の憂は、しかし、そのまま突っ立ってはいなかった。

猛にだけは見えたが、物凄い速さであっという間にエネルギー体に変わり、本物の憂を包み込むと校舎の外へ窓をぶち破って飛び出した。

ヴュロロロロ……

いきなり、不気味な音が響いた。

猛は、この音を知っていた。まさに、マイナス・エネルギーが怪獣に実体化するときに、鳴り響く音である。

その邪悪なエネルギー体は憂を取り込んだまま、瞬く間に醜い顔をした巨大な怪獣「紅蓮怪獣 アナザー・ホー」へと変化を遂げていた。

怪獣は、目が赤く大きく、口には鋭いキバがならんでいる。怪獣のからだ全体は赤褐色で、下腕が肥大しており、そこには二本の力ギ爪があった。

『憎め、憂！ 軽音部員たちを、憎むのだ……！』

怪獣は、さらに憂に対し、軽音部員たちを憎むようにそそのかしながら、暴れ始めた。

憂の嫉妬心をきっかけに目覚めた怪獣は、憂にもっと軽音部員を憎むように仕向け、その憎しみのパワーを増幅して力を蓄えようとしていた。

そして、最後の仕上げに唯を含んだメンバー全員を踏みつぶして、憂の悲しみと絶望のマイナス・エネルギーを吸収し、さらに強力な怪獣になって現実世界に躍り出ようとするのがその目的であろう、と猛は踏んだ。

（許せない……！）

猛は、卑劣な怪獣に対する怒りが、心の奥底からふつつつと沸いてくるのを感じた。

憂という少女のちょっとした心の隙に付け込んで、とことん利用

しようとする怪物が本当に許せなかった。

猛は、思わずギュッと拳を握りしめ、そして、ついに決意を固めた。

(よし……！)

そのとき、怪物が校舎ごとみんなを潰そうと、その大きな腕を振り上げた

グワッシャ　　ンッ……

ガラガラッ……、と校舎が崩れ落ちるその一瞬前に、猛はみんなを守り、怪物から離れた体育館の横へとみんなをレポートさせることに成功した。

軽音部メンバーたちも、そしてさわ子も、何が起こったのか分からず、キョトンとした顔をしていた。

「ちよっ……、今の何？」

「今まで私たち、確かに校舎のなかにいたよな」

「……………」

いきなりのレポートに状況がつかめず、それぞれ首をかしげて唯たちは不思議がる。

猛は、思いを込め、その一人一人に言葉をかけた。

「唯クン、これからも、ギターの練習を頑張れよ」

そう猛が云うと、唯は丸い大きな目をおよっという感じにしばたいた。

「澪クン、きみのボーカルは本当に素敵だったよ」

その言葉を聞くと、澪はちよっただけ微笑んだ。

「梓クン、唯クンと、これからも仲良くな」

梓は、相変わらずキョトンとしている。猛を見上げている表情は非常に可愛い。

「細クン、これからも、美味しいお茶をみんなに淹れてあげてくれ
細も、その言葉におっとり微笑んだ。

「律クン、みんなを引っ張っていくのは、キミしかいないよ」

そう云うと、律は背伸びするようにからだを伸ばし、好奇心にあ

ふれた瞳で猛を見つめた。

猛は、そうして一人ずつの顔をじっと見つめ、最後にさわ子に、
「さわ子先生もお元気で！」

と云うと、怪獣に向かつて走り出した。
後ろから、唯たちの叫ぶ声が聞こえる。

「危ないよおツ、猛ちゃん！」

そう叫んだのは、おそらく唯か。

「どこ行くの？ 戻ってきてよおツ！」

多分、そう叫んだのは律であろう、と猛は心のなかで思った。

(みんな、元気でな……)

猛に気づいた怪獣は、火の玉のような光線を吐きかける。

その爆発のなかを走りながら、ついに、猛は、腰にあるブライト
スティックを抜いた……

両手を交互に突き出し、その音が空を切る。

フォッ、フォッ

「エイティツ!!!」

矢的猛は、M78星雲からやってきたウルトラマン80であった。
しかし、その正体をみんなに知られれば、地球上にはいられなくな
るといふ掟があった……。

第六章 異次元の怪獣（後書き）

次は、いよいよ80の登場です！

さてさて、80は、紅蓮怪獣アナザー・ホーを倒せるのでしょうか？

次章乞うご期待！

第七章 怪獣との戦い（前書き）

とうとう、ウルトラマン80と怪獣との戦いです！
待っててくださいました方、ありがとうございます。
どうぞ、よろしく！

第七章 怪獣との戦い

第七章 怪獣との戦い

1

「エイティッ！」

猛がそう叫んだ瞬間、その場がまばゆい光に包まれた。

そしてその光が消えた後、猛が立っていたはずの場所には銀色の巨人が右手をあげたポーズで立っていたのである。

ウルトラマン80を初めて見た唯たちは、驚きのあまり後ろに倒れそうになった。

「なっ、何？ あれ……」

「あの大きな巨人は、猛ちゃんなの？」

「まさか……！」

唯たちは、口々に騒ぎ立てた。

「や、矢的先生が……」

さわ子は、自分の目にうつった映像にとてもシヨックを受けたらしく、へなへなとその場に座りこんでしまった。そのまま、目を閉じてぐったりとしている。

「さ、わ、ちゃ〜ん……！」

そう云って唯が声をかけても、ウンともスンとも云わない。

「ダメだ、こりゃ」

「よっぼど、シヨックだったのね」

軽音部メンバーは、お互いに顔を見合わせ、肩をすくめた。

しかし、80はそんなことにかまっていられる状態ではない。

フォッ！

80がサツとファイティングポーズを取ると、その手刀が空を切

つて音を響かせた。

そして、水平チョップを一発ドカツと怪獣の首辺りにめり込ませると、そこから火花が散った。

続けて、後ろまわし蹴りを加えると、その部分も小さな爆発を起こす。

何故、爆発が起こるのかというと、拳に80がエネルギーを込めて威力を倍増させているからである。

それが、80が得意とする宇宙拳法の一つであるウルトラ拳なのだ。

「あれって、本当に猛ちゃん？」

戦闘の様子を見ながら、紬が不安そうに云う。

「もしかして、あれも敵の宇宙人だったら……」

しかし、80は連続バク転で怪獣から少し距離をとると、助走をつけて跳び上がり、見事なとび蹴りを怪獣に加えた。

その反動でもんどりうって倒れる怪獣。

その光景を見て、唯は断定した。

「あの巨人は、きっと猛ちゃんだよ。多分、憂を救うために戦ってくれてるんだよ！」

後ろに転がった怪獣はすぐに立ち上がり、負けじと口から火炎光線を吐いて応戦する。

しかし80は、その攻撃を身軽に連続バク転を続けることで見事にかわしていった。

唯たちは、思わずそんな80に声援を送った。

「頑張れっ、猛ちゃん！」

「その調子だよっ！」

80はその声援を背に、右手を拳げる形でサツと両腕を掲げた。カラータイマーの辺りが、赤くピカツと光を放つ。

そして80は右手を水平に掲げると、得意技のウルトラストリートフラッシュ光線を指先からビツと怪獣にお見舞いするのだった。戦いは、どう見ても80優勢だった。

しかし、怪獣は奥の手を使ってきた。

たたみかけて攻撃しようとする80に見せつけるように、突如ア
ナザーホーの額の辺りが盛り上がった。

そして、緑の大きなコブになったかと思うと、それがパツクリ割
れたようになって、その中から捕らわれた憂の姿が現れたのだ。

「憂！」

「憂ちゃん！」

軽音部メンバーもそれを見て騒ぎ立てる。

憂は、触手のような怪獣のからだの一部に捕らわれて意識を失っ
ており、その顔はひどく青ざめていたが、それでも生きていること
が80にははつきりと感じられた。

そのため、人質になっている憂を気づかい、怪獣に攻撃できなく
なる80 そんな80の心の隙をつき、怪獣の腕から茶色の長い
触手のようなものが伸びてきて、80の首にぐるぐると巻きついた。

「きゃあっ！」

「猛ちゃん！」

「ウツ……！」

首に何重にも触手を巻きつけられて、思わず80は呻き声を上げ
た。

そのまま、怪獣の思うようからだを振りまわされてしまう。

ブンブンと、右に左にからだを揺らされ、最後には、地面にから
だを打ちつけられてしまった。

そして、とどめに触手から高圧電流が流れた。

『ウワアッ……！』

苦しみのあまり、80は声をあげた。

ピーコン、ピーコン……

そのうえカラータイマーが点滅し始める。80絶対絶命のピンチ！
「どうすればいいっ？」

それを見ながら、律が横にいた溻をつついた。

「どづって……、わからないよおっ！」

澪は、80のピンチを見て、既に怯えているのか震えている。

「う、うっ……」

さわ子は相変わらずぐったりとしたままだ。

「何とか、助けなきゃ大変ですよ！」

梓がそう叫んだ。

「でも……、私たちに出来る事って、あるの？」

紬がそう戸惑いながら云う。

すると、唯は、

「そっだっ！」

と叫んだ。

「みんな、音楽室へ行こう！」

「音楽室へ？」

軽音部メンバーは、全員顔を見合わせた。

*

触手を首に巻きつけられたままの80は、以前として苦しみ続けていた。

怪物が圧倒的に優勢である。

このまま、80は闘いに負けてしまうのか……？

ところが、その時、80の耳にどこかから、小さく歌が聞こえてきたのである。

その歌は、懐かしさを伴うとともに、80を勇気づけてくれるよ
うな、とてもパワーを持つ歌であった。

80は、ゆっくりと思いだした。

その歌は、以前矢的猛として、軽音部でメンバーの少女たちとともに演奏した、あの『U&I』という曲であった。

その歌は、鏡の中の異次元空間に生まれた、鏡映しの校舎の音楽室から聞こえてくる……。

そのとき、怪獣の動きが急に鈍くなった。

「……………」

唯たち軽音部員が憂に届けと力いっぱい演奏を続けている。

友情、愛情、感謝といった素晴らしいプラスのエネルギーが歌に乗ってあふれてくる。

そのうちに、怪獣の動きがだんだん小さくなってきて、そして止まってしまった。

憂が怪獣の動きを必死で抑えこんでいるのが80にはわかった。

80は、両手を軽く掲げ、胸を赤く光らせた。

そして二つのブーメラン型のビームを自在に操る、ウルトラダブルアローを怪獣に向けて発射した。

怪獣の触手や爪、牙がそれによってそぎ落とされる。

最後には、怪獣の額にあった憂が捕らわれているコブを切り落とすことにも成功した。

宙に舞うコブを見事にキャッチした80は、憂を校舎の屋上にそ

つと下ろした。

すると、すぐに唯、梓、細が校舎のなかから走って飛び出てきた。

さわりだけは精神的疲労のため、ほとんどぐったりして律と漣に二人がかりで支えられるようにしてやってきたのだったが、深刻そうな憂の様子を見ると、自分のダメージなど忘れてしまったかのように憂に駆け寄った。

「憂ちゃん、憂ちゃん！」

「憂！」

「憂ちゃん！」

「しっかりして、憂ちゃん！」

「大丈夫？ 誰か、冷やしたタオル持ってきて」

さわ子が教師の立場を思いだし、きびきびと動き始める。

皆が憂を介抱するのを見届けた80は、エネルギーの素であった憂を奪還されて弱体化したアナザーホーメがけて、

『トオツ……！』

と高く跳び上がった。

そして、渾身のウルトラ400文キックをその顔面にくらわせる。ドオツ……、と派手に倒れる怪獣。

サツとまたファイティングポーズを取ると、80は今度は立ちあがったばかりの怪獣の首筋を右腕でチョップし、ウルトラ拳をまた炸裂させた。

その次は、キックを決める。

それから怪獣の頭の角をつかみ、力を込めて怪獣を投げ飛ばした。怪獣は激しく倒れ、ダメージを受けたからだでゆっくりと立ち上がり、よろよろとする。

すると80は、両腕を挙げてポーズを取り、腕をL字型に組んだ。今度は虹色の光の光線が右腕から放たれる。

これこそ、必殺のサクシウム光線である！

ビーーーーッ！

フィルルルル……

マイナス・エネルギーが消滅していく音がした。

怪獣はとどめをさされ、そのままその大きなからだはゆっくりと前に倒れていった。

周囲に大きな爆発音が響く。

80は、怪獣との戦いに勝ったのだ。

しかし

「憂ちゃん!」

「憂!」

80の耳に、軽音部のみんなの悲痛な声が届いた。

見ると、怪獣に身も心も傷つけられた憂が苦痛に呻いていた。

「憂ちゃん、しつかりして!」

さわ子が濡れたタオルで憂の額を冷やしている。

「どうしよう……。もしかしたら、重態だわ……」

さわ子は、ため息をついた。

もっと、早く憂の異変に気づいていれば、こんなことにはならなかったかもしれないのに……

80は、強い後悔の念を感じていた。

「憂が目覚めないよ」

唯が泣いていた。

「どうしたらいいの？ 猛ちゃん……」

すると、80は、ゆっくりとうなづいた。

そして、ポーズを取り、アメジストのような輝きを放つ光線を、憂に向けて優しく発射した。

これは、80の持つメデイカルパワーというもので、人間のからだの傷と心の傷を　　わずかではあるが　　癒す力があるものだった。

すると、ゆっくりと瞼を開く憂。

「よかった、憂」

「お姉ちゃん……」

手をギョツと取り合って二人の姉妹は喜んだ。

顔を見つめ合って、にっこりとする。

その瞬間、地鳴りがし始め、空に亀裂が入り始めた。

「きゃあつ、地震……？」

「何が起こったの……？」

唯たちは、慌てふためく。

この異空間をつくり出していた怪獣が消滅したため、異空間が壊れてだんだんと崩壊し始めたのだ、と80は悟った。

80は、しゃがみ込み、校舎の屋上にいる唯たちに手を差し伸べた。

さわ子といえば、今までは生徒の一大事にきびきびと動いていたが、80が手のひらを差し伸べたことよって、さっきまでの相応な精神的ストレスをいきなり思い出したようだった。

彼女は、ほとんどフラフラしながら、ひとことこう云った。

「も……、死ぬ」

「さわちゃん、早く、早く！」

軽音部メンバーと一緒に、さわ子も80の手のひらに引っ張り込まれるように乗せられる。

全員が乗ったのを確認した80は、

「シュワッ……！」

と、声をあげて、大空へ飛び立った。

そして、ポツカリと黒い穴を見させている空間をくぐり、次元移動の力を発揮して、無事にみんなで異空間を脱出することに成功したのだった……。

第七章 怪獣との戦い（後書き）

どうでしたか？

この話が全体のいちばんの山場だと思います。
面白く、読んでいただければ幸いに思います。
どうも、ありがとうございました。

第八章 新たなる始まり（前書き）

やっと、一応最終回にこぎつけました！
更新を待っていてくれた方、ありがとうございます！

第八章 新たなる始まり

第八章 新たなる始まり（ウルトラの父の言葉）

1

鏡のなかの世界からもとの世界に戻って来た80たちは、空間をレポートして、夜中の校舎の裏側に姿を現した。

80は、手のひらをそつと地面におろし、軽音部メンバーとさわ子が手のひらから降りるのを見届けると、立ち上がって上に両手をかざし、胸の位置に腕を交差させた。

すると、80の胸の辺りがピカツと光るとともに、光の渦が80のからだを取り巻き、それがだんだん小さくなって猛の姿へと戻ったのである。

「猛ちゃんっ……!!」

「やっぱり、猛ちゃんだったのね……!!」

猛に殺到しようとする唯たち　そして再び、めまいを起こしそうにフラツとしたさわ子が、額に手をあてて涙ぐみながら猛を見つめた。

「矢的先生が……、普通の人間じゃない……」

猛は、寄ってくる唯たちを手で押しとどめて、まず眠っている憂に再びマイナス・エネルギー計を近づけた。

しかし、憂のからだから、マイナスエネルギーはすっかりと消えていた。

猛は、

（よかった……）

と、思わず安堵の吐息を洩らした。

「ねえっ、猛ちゃんッ!!」

唯がまず、背伸びするようにして猛に詰め寄った。

「猛ちゃんは、一体何者なの？ あの巨人に変身できるのは何故？」
「一体、どうしてあんなふうに怪獣と戦えるの？ 猛ちゃんは、正義の味方？」

「えっと、猛ちゃんは、……」

「 矢的先生……」

溼の言葉を遮るようにして、暗い声で、さわ子が訊いた。

「 矢的先生は、普通の人間ではないんですね……」
その言葉に、皆、いつせいにシンとなった。

「 そうです、さわ子先生」

猛は、凜とした口調で云った。

「 ぼくは、実はM78星雲からやってきた宇宙人なのです。ぼくの故郷は、ウルトラの星とも呼ばれ、星の住人は、長年宇宙の平和を守るために戦うのを使命としているのです」

「ウルトラの星？」

さわ子は呆然となった。

唯は律に小さな声で、

「ウルトラの星って知ってる？」

「ウルトラ、だろ？」

と律。

「 実は、ぼくは人間の怒りや憎しみなどの負の感情から生まれるマイナスエネルギーが、今回のように怪獣を生みだしたり、邪悪な怪獣や侵略者を呼び寄せたりすることを知り、その調査をするために地球にやってきました」

「地球を守るために？」

「 ええ」

と猛は微笑んだ。

「 そうした怪獣や侵略者の脅威から地球の人々を守り、マイナスエネルギーを研究したり、その対策を考えることがぼくの任務だったのです……」

そう云って、猛は皆の表情を見つめた。

軽音部メンバーは全員、猛の驚きの告白に、目を丸くしている。

しかし、80に変身するところや、もとの姿に戻るところを現実にも目のあたりにしたため、それをウソだなどと否定するものは誰もいなかった。

「そうだったんだ……」

律がごくん、と唾を飲みこんだ。

「猛ちゃんって、他の惑星から来た宇宙人、だったんだ……」

「……………」

涙ぐむさわ子。

「すっごくいい！ 猛ちゃんツ！！」

唯が、いきなりはしゃぎ出した。

「そんな人、なかなかいないよ。ねえっ、サインちょうだいッ！」

「私にもっ！ そんな展開って、本当にあるのね。漫画や映画のなかだけかと思ってたけど」

紬がうきうきした調子で云う。

「私たち、宇宙人と話してんだな。未知との遭遇だ！」

と漣が云つと、梓も、

「矢的先生が正義の味方の宇宙人だったなんて、信じられない展開ですよー！」

と笑顔で云った。

そして、

「ありがとう、猛ちゃん。憂のこと、助けてくれて」

唯が、そう云って微笑んだ。

「それにあたしたちも、猛ちゃんが変身して助けてくれなかったら、多分、生命も危なかったかも……」

「そうだよ、この世界に生きて戻れなかったかもしれないし」

ぐったりと元気のないさわ子に対し、軽音部メンバーは、全員笑顔で猛を見つめていた。

その笑顔には、猛を自分たちとは異なる者として拒むような心情

は、微塵も見られなかった。

思わず猛も、そんな唯たちに対し、笑顔になった。

「ぼくのほうこそ、ありがとう。 怪獣との戦いのなかで、ぼくがピンチに陥ったとき、キミたちの歌が救ってくれたんだ」

「うん」

と唯がうなづいた。

「あの“U&I”って歌はね、実は、いつも私を助けてくれる、憂への感謝の気持ちを込めて、私が作詞したものなんだ。……それにみんなで曲をつけて、アレンジして、一つの歌として仕上げたんだよ」

そして、その唯の気持ちは、軽音部メンバー全員の気持ちでもあった。

それが、怪獣に増幅されていたものだとはいえ、憂が少しでも自分たちの存在のために寂しい思いをしていたのだ、と知った軽音部のみんなは、この唯の提案でその気持ちを少しでも憂に伝えたい、と思い、危険を冒してまで音楽室へ走って、あの“U&I”を歌ったのだ。

何故、わざわざ音楽室へ行ったのか、というと、みんなは楽器を持ってきていたが律のドラムだけは音楽室に置きっぱなしだったからだった。

鏡のなかのイミテーションの校舎だったとはいえ、教室や廊下が細部まで同じであったことを逃げるときに覚えていた唯は、ひよっとしたらドラムもあるかもしれない、と考えたのである。

そして、その唯の考えは、見事に当たっていたのだ！

律は云った。

「あのとき、あの異次元の音楽室にドラムがなかったら、私はエアドラムで参加しようと思ってたんだ。だけど、結局はあそこにドラムがちゃんとあった。だから、私も無事に異次元ドラムを思う存分、叩きまくることが出来たんだよ」

「そうなんだよ、猛ちゃん！」

と唯が云つ。

「とにかく、一件落着だね」

「うん」

そう云つて、無事に帰れたことを喜ぶみんなであったが、猛の胸の内は重かった。

空には、帰還することを命じるウルトラサインが浮かんでいる。

もし、地球人にその正体を知られたら、地球から去らねばならぬ。

それは、今までほとんど例外なく実行されてきた、ウルトラの星の厳しい掟なのである。

そして、実は、彼女たちには語らなかつたが、今回の任務はウルトラの星でも最高のエリート戦士だけが入ることを許される、ウルトラ兄弟への仲間入りをかけた試験でもあつた。

しかし、帰還することは、その自分の夢であつた候補生の資格をなく奪われることをも意味していた。

猛は、思わず空の星を見上げた。

(残念でない、といえば、嘘になるが、後悔はしてないさ……。大事な生徒たちを守ることができたんだからな……)

そんな、元気がない猛の様子に、すぐに唯たちが気づいた。

「どうしたの？ 猛ちゃん」

「何だか、沈んだ顔してるね」

そう云つて、心配そうにみんなは猛を囲んできた。

「実は……」

猛は、そう云つて重い事実を切り出した。

「ウルトラの星では、地球人に正体がばれたら、故郷に帰らなければならぬという厳しい掟があるんだ……」

みんな、再びシンとした。

猛の表情を見て、それが動かしがたい事実であることを察したからであつた。

「そんな……」

それを聞いて、いきなりさわ子が猛のそばへやってきた。

「嘘でしょ？ 矢的先生……」

「嘘ではありませんよ」

猛は、悲しげに微笑んだ。

「ぼくは、故郷に帰らなければなりません」

「そんな、そんな……私……」

さわ子は涙をこぼした。

「私、矢的先生が宇宙人だと分かって、確かにショックを受けました。だけど、これでお別れだなんて、あまりにも悲しすぎます。

私たちの楽しい時間は、これからではないですか？ 私は矢的先生は、この軽音部の仲間だと思っています。多分、この生徒たちも、そうです。私は、あなたが教師としていてくれて、楽しく皆で部活ができる……、それだけでいい、と今、思っています。

お願いだから、帰るなんて、云わないでください」

「そうだよ、先生！」

唯が、じつと猛の顔を見つめた。

「私たち、これからじゃん。楽しくなるの」

と律が云う。

「そうだよ、せっかく、宇宙人と知り合えたのに」

漣は、半ベソをかいている。

「絶対、ヤだ！ 先生が帰っちゃうなんて……。あんまりです」と梓。

紬は、

「何とか、地球にとどまることはできないの？」

と、すでに涙を目じりにあふれさせている。

「ダメなのです、さわ子先生」

猛も、ちよつとだけ目をつるませた。

「皆も、ありがとう。　　だけど、ウルトラの星の掟は絶対なんだ。

これまで、例外はほとんど聞いたことがない」

「　　そんな……」

みんなは、しょんぼりとしてしまった。

助かって喜んだのもつかの間、こんな悲しい別れが待っているなんて、みんな想像もしていなかったのだ。

ところが、シンとしていているみんなの中で、さわ子がいきなり、

「そうだ！」

と手のひらをこぶしで叩いた。

「以前、矢的先生は、部室での私の実態を外部の人に秘密にしてくれたことがありますよね。そのお返しに、私たちも先生の正

体のこと、絶対誰にも話さないで、秘密にしときます。もちろん、

この子たちも。 だったら、帰らなくてすむでしょう？」

「さわちゃん、ナイス。いい案だよ！」

唯たちも笑顔を取り戻した。

「私たちの正義の宇宙人、猛ちゃんは、これからも私たちと一緒にだよ！ 全然、帰る必要なんて、ないんだよ！」

「みんな、ちゃんと秘密にするし」

「うん」

そういつて無邪気にはしゃぎ出す軽音部のみんなに対し、猛は暗い気持ちで、掟は掟だから帰るしかないのだ、と事実を告げようとした……。

そのとき

『候補生、80号。』

いや、ウルトラマン80よ………』

ウルトラの父の声が、猛だけでなく、唯たちやさわ子の耳にまでハッキリと響きわたったのだ。

空を見上げると、そこには宇宙警備隊の大隊長であるウルトラの

父の姿が、大きく浮かんでいた。

「ウルトラの父！」

思わず、猛は声を上げた。

「えっ？ 何、あれ」

「ウルトラの父って、誰？」

「もしかして、猛ちゃんのお父さんなの？」

などと言って、唯たちが騒ぐ。

猛は、笑って云った。

「違うよ。ぼくの上司みたいなものさ」

「ふうん」

「そうなんだ……」

唯たちは、目を丸くして空を見上げた。

「 私たちは、地球人に見習わねばならぬところがあると、今、その少女たちを見ていて気がついた。

少女たちも、そのそばにいる女性教師も、おまえの正体を絶対に隠し、秘密を守りぬこうと決心していることがつよく伝わってくる……。

そして、少女たちは、おまえがこの場からいなくなるなど、そんな悲しい展開になることは、ほとんど信じていないのだ。

そのため、今、おまえに帰還を命じるウルトラサインを送ったが、私は、その処置に疑問を感じ始めた。

本当に、それでいいのか、と。

今まで、赴任先の星の住人に正体を知られて、それでもその星に

とどまることを許した例は非常に少ない。

『だが、この場合には、例外を認めるべきではないか、と私は考えている。』

猛は、耳を疑った。

「ウルトラの父、それは本当ですか？」

そういうと、夜空に映し出されたウルトラの父は、先ほどとは打って変わったいたずらっぽい口調で、

『ハハハ、鏡の中まではわしの目も届かんさ』
と、笑った。

『大事なものは、単にどんな場合でも掟どおりにする、というようなことではない。』

時には、例外をつくっても、人の心の絆のほうを大事にすることが大切なのだ。

そして、80を異星の人間だと知ってもなお教師として、友人として慕ってくれる彼女たちの姿を見て、私は、彼女たちの心を信じてみたくなったのだ。』

「ありがとうございます、ウルトラの父……」

猛は、目に涙をそっと浮かべた。

ウルトラの父は、それから急に口調を厳しくした。

『実をいうと、理由はそれだけではないのだ、80。』

実は現在、宇宙規模でマイナスエネルギーが高まっており、怪獣たちが凶暴化する事態となっている。

そのため、ウルトラ兄弟をはじめとする宇宙警備隊員全員で対応に当たらなければならない。

だから、戦力は一人でも欠けてほしくはない、ということだ。

つまり、まだこの七人にしか知られておらず、絶対に他の者に口外しない、という約束をしてくれた今回に限り、80が地球上の任務を続けることを、例外的に許そう。

これからも、仲間とともに、地球を守ってくれ。

頼むぞ、80………』

猛は、思わずその言葉に大きくなづいた。

「わかりました、ウルトラの父………」
すると今度は、

『ハハハ………』

とウルトラの父は、愉快そうに笑って云った。

『やはり、仲間とはいいものだな、80。』

見ていると、私までキミたちの仲間に入りたくなるほどだ。

これからも、80を仲間として、よろしく頼むよ。

地球人の軽音部のみんな……」

「いやったあぁっ!」

「ひゃっほうっ!」

軽音部のみんなは跳びあがって喜んだ。

「よかったね、猛ちゃん。これでこれからも一緒にいられるよ」

「ウルトラの父って、話しわかるっ!」

「ウルトラ、だろ?」

などと、お互いに突っ込んだりしながら、みんな喜びでいっぱいだった。

さわ子も、いつもどおり元気な様子になっている。

みんなは、猛を囲んで、手を取り合って喜んだ。

「本当に、本当に、嬉しいね」

「ああ、ぼくも、本当に嬉しい……」

猛も、心からの笑顔を浮かべた。

「怪獣は、ちゃんと退治できたし　　猛ちゃんは、これからもずっ

と一緒なんだね」

「うん」

とみんな、嬉しそうにうなづく。

「そうだね、今度、矢的先生のためにみんなでパーティーでも開きたいわね」

と、上機嫌のさわ子が云った。

「矢的先生が、地球に来てくれてありがとうって、歓迎パーティー!」

「その案、イケてるっ!」

と律が叫んだ。

みんなも、

「そうだね！」

「うん！」

などと口々にうなづいた。

「ありがとう！」

猛は、笑いながら、心の底からそうお礼を述べた。

*

「おはようございます」

「おはようございます、矢的先生」

「おはようっ！」

数日後、朝の桜ヶ丘高校の門前には、元気に生徒たちに挨拶する矢的猛の姿があった。

(これからも、こうして生徒たちと共にいられるんだな……)

猛の胸に、熱いものが込み上げる。

ウルトラの父から地球上にとどまる許しを得た後のことを、猛は思い返した。

あの後、疲れきって眠ったままの憂を背負って家まで送り、軽音部のみんなやさわ子のことも、一人ずつ送って自宅まで帰らせた。

その後憂だけは、それから熱を出してしばらく学校を休むことになった。

何しろ、怪我も完全には治っていなかったし、疲れも出たのだから。

しかし今日は、体調のよくなった憂が無事に学校へやってくる予定の日だと、唯から聞かされていたのである。

唯は、こう云っていた。

(憂は、多分、猛ちゃんが巨人に変身したこととか、分かってないみたい。だから、私、そのこと憂には黙ってるんだ。……それに、憂は自分が怪獣に捕らわれの身になって、猛ちゃんに助けられ

たことも、夢だっと思ってるんだよ。　確かに、あんまり現実離れしたことだから、それも仕方ないと思うんだけど……）」

その言葉に、猛はこう返事を返した。

（多分、それならそういうことにしといたほうがいいかもしれないな。憂クンにとっては、きっとツライ記憶だろうから、夢だったってことにしておくのも、一つの方法だよ）

そして、猛は考えた。

今にして思えば、学校で噂になった幽霊は、実体をとる前のマイナスエネルギーの姿だったのだろう。

そしてさわ子はもともと、いつの日からか憂の様子がるで別人のように変わるときがあるので、クラスで何かあったのではないかな？ と猛に聞こうとしていたのだという。

それはおそらく、憂が梓たちと肝試しをした日からで、きっと憂の姿を借りてマイナスエネルギーが校内を歩いているのにさわ子が出くわしたからに違いない。

（そう考えれば、すべて納得できるよな）

と、猛は心のなかで独りごちた。

その時、向こうから軽音部のみんなが、憂を交えて楽しそうに歩いてきた。

猛を見つけると、手を振って声をかけてくる。

「おはよう、猛ちゃん！」

「ああ、おはよう！」

「憂、すっかり元気になったよ、ね？」

「うん、お姉ちゃん」

憂は、猛にも笑顔を見せた。

梓と仲良く手をつないでいる。

「私、ずっと悪い夢を見てたんだ」

と憂は梓に云った。

「だって、私、大好きな梓ちゃんやみんなを、ずっと苦しめるような夢を見てたんだ。あれが自分の願望だったりしたら、怖いけど……」

…

「違うよ、憂」

と、梓は優しく云った。

「気にしないで、そんなのただの夢だから」

「そうだね」

と、憂は小さくうなづいた。

もう、二人の間には何のわだかまりもないようだった。

「猛ちゃん、今日も、放課後軽音部においでよね」

と、律が云う。

「そうだよ、また、“U & I”の練習するし」

と漣。

「猛ちゃん、またギターを弾いてちょうだいね」

と云って紬が笑った。

「わかってるよ」

猛は、みんなに笑顔を返した。

「じゃあ、また後で！」

律が手を振った。

軽音部のみんなが校舎のほうへ歩いていく様子を眺めながら、猛は一人微笑んでいた。

それは平和で、優しい光景であった。

こんな光景がずっと続いてほしい……

猛は、思わずそう願わずにはいられなかった。

しかし、これから地球にまた怪獣や侵略者が押し寄せる可能性があるのだ。

そう思うと、猛はやはり身が引き締まる思いがするのだった。

ウルトラマン80、矢的猛の活躍は、まだ始まったばかりなのだ。

第八章 新たなる始まり（後書き）

この話で一応、第一話は完結です。

しかし、第二話にこの後、続く予定になっています。

これから、どうぞよろしく！

第一章 新入部員と着ぐるみ（前書き）

お待たせしました。

ようやく第二話目に突入です！

第一章 新入部員と着ぐるみ

第一章 新入部員と着ぐるみ〜新入部員獲得のために〜

1

チチチ……

キッチンの小窓から、雀のさえずる声が聞こえてくる。

コトコトコト……

矢的猛は、珍しく自分で味噌汁の朝食をつくりながら、とても幸せな気分でした。

矢的猛ことウルトラの星からやってきたエージェント・ウルトラマン80は、とある事件の際に平沢唯たち軽音部のメンバーにその正体を明かしてしまったのだった。

しかし、通例どおり故郷に帰らなければならないことにはならず、特別なウルトラの父のはからいによって、地球にとどまることが許されたのだ。

（そのことを本当に幸せだって思わなかったら、罰があたっちゃうよな……）

猛は、そのことを思い返しながら、つい鼻歌が出そうな嬉しい気分になるのだった。

とにかく、自分の正体を知っていて、それでも今まで通り普通に受け入れてくれる仲間がいる。しかも、ウルトラマン80としての任務を果たすことを応援までしてくれる。ということが、嫌がおうにも猛の心を浮き立たせるのだ。

そんな恵まれた環境で任務を遂行できることなど、猛にとっては初めての経験だったからだった。

何しろ、これまでも任務を遂行していくうえで様々な誤解を受け

続けてきた猛である。

担当クラスの女生徒たちにストーカー行為をしていると誤解されたり、学校の守衛さんに忘れ物が多い、などと勘違いされたり……。今まで、孤独に任務をこなしていくことのツラさをまったく感じないわけにはいかなかった。

だが、これからは唯たち軽音部のみんなには自分の起こす行動の本当の意味を打ち明けることもできるだろう。おそらく、唯たちにも、さわ子にも。

そして多分唯たちは、周囲に誤解されやすい自分のことを明るく励ましてくれるに違いない。

そう考えると、猛は何にもかえがたい宝を運命の神から授けられたという気分になるのだった。

(仲間、か……)

仲間とはいいいものだな……。

そう云ったウルトラの父の言葉を猛は自然と思いだした。

(ぼくはもう、独りじゃない。 ささえてくれる仲間がいるんだ)

そしてウルトラの父が云ったように、これから襲い来るであろう怪獣の脅威や宇宙人の侵略を阻止するため、この地球上で自分が主体となって戦っていかねければならないのだ……。

猛はそう思い、一人気持ちを引き締めるのであった。

*

猛は支度を済ませると、今日は早めに住んでいるアパートから出勤することにした。

猛の勤めている桜ヶ丘高校は、このアパートから出てずっとまっすぐの道路沿いを歩いていき、それから右に曲がって前方に続いている傾斜道をずっと上がっていった場所にある。

猛の通う通勤路は都心に向かっていくルートであるため、猛は通

勤中に、たくさんのサラリーマンたちが通勤していく波と一緒にいることが多かった。

だが今日の朝は、いつもより少し早く家を出たせいか勤め人たちの姿はまばらで、ただ青い空と赤茶けた土手の緑だけが、殺風景な景色に少し色取りを添えているように見えた。

そのとき

猛は思わずハツとした。

ポケットにあるマイナス・エネルギー計が反応している。

(一体誰が……)

そう思っただけ周囲をみまわすが、誰がマイナスエネルギーを発しているのかは、にわかにはわからなかった。

おそらくウルトラの父が云っていたように、全宇宙規模でマイナスエネルギーが高まっているのだろう。

(このままでは、近いうちには必ずまた怪獣が出る……)

そう感じて思わず危機感を覚える猛に、

「矢的君！」

と、いきなり後ろから呼び止める声をかける者があった。

猛は後ろを振り向いた。

「オオヤマさん！」

それは、最近通勤路が一緒になることが多く、挨拶を交わすうちに知りあいになってしまったオオヤマという紳士だった。

猛は、彼と並んでいつものようにしゃべりながら歩きだした。

「やあ、今日は本当にいい天気ですね」

胸の内の不安を払拭するように、猛はそう云ってみた。

「確かに。とても気持ちのいい朝だね」

オオヤマはそう応えた。

「今朝は、こないだ云った庭のハナショウブに水をやってきたよ」

「へえ、そういえば庭にその花がたくさん咲いてるって云ってましたね」

「そうなんだ。風流でいいとは思ってたが、男の一人所帯では少々

もてあましぎみでね」

オオヤマはそうとうと微笑んだ。

「綺麗な花を見るのって、きつと心が和むんじゃないかなあ」

「もし、キミが欲しいなら、今度少し持ってきてあげようか？」

いつものように他愛のない会話をしながらも、猛はオオヤマが動作の端々にただ者ではない雰囲気を漂わせているのを見逃さなかった。

たとえるなら、まるで軍人のような隙のない動きを、オオヤマは身につけていたのである。

(この人は、本当は一体何者なんだろう……)

猛がそんなことを考えていると、オオヤマはふと、

「矢的君……、キミは、宇宙人って信じるかな？」

と聞いてきた。

脈絡のない意外な質問に、思わず猛は、

「え？」

と彼の顔を見た。

すると彼は、

「いや、なんでもない、忘れてくれ」

「……………」

「じゃ、また」

と云うと、いつも別れる地点である四つ角を右にまがって行った。猛は少しキョトンとしたまま、その姿を見送るしかなかったのである。

2

キンコンカンコン……

ホームルーム時間の終わりを告げる鐘が校内に鳴り響く。

「じゃあ、今日はこれで解散しよう」

そう猛が云うと、学級委員の生徒が元気よく、

「起立、礼！」

と号令をかけた。

「ありがとうございます！」

そう挨拶すると女生徒たちは、今日はいつものようにクラス内で友達とおしゃべりを始めるのではなく、急ぐように次々と教室を出ていく。

「あれ？ 今日は何かあるのかな？」

と猛が独りごちるようにそう云うと、それを聞きつけた憂が、

「先生、知らないんですか？」

と云った。

「今日は、各部活動が新入部員を集める日ですよ。だから、梓ちゃんもすぐに出てっちゃったでしょ？」

「あ、そうか。忘れてたな」

そう云いながら、猛はすっかり元気になった憂のことを、嬉しそうな表情で見つめた。

「じゃあ、軽音部の唯くんたちも、新入部員を集めるのにきつと必死だろうな」

「私は、主に帰宅部だからあんまり関係ないんですけどね。今日も親は旅行だから、帰って夕食の買い物とかもしとかなくちゃだし……」

猛は、その言葉に微笑んだ。

「憂くんは、よく夕食の支度をするみたいだから感心だね。料理がとても上手だって、唯くんが以前褒めてたよ」

「いえ、それほどでもないんです」

褒められて、憂は恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「私、それぐらいしかとりえないし……」

「でも、キミはずっと帰宅部を続けるのかい？ 唯くんのように部活動をやってみるのも楽しいもんだよ。料理の研究部も確かこ

の学校にはなかつたかな？」

「いえ、いいんです」

猛の言葉に、憂は首を振った。

「それか、お姉さんと同じ軽音部に入部してみたら？」

「いえ、あの……、私、今は帰宅部のほうがいいんです。そのほうがいろいろ家のことができるから」

そう云って微笑む憂は、まだ高校生であるというのにもういっばしの家庭を持つ主婦のようだった。

「それにしても、お姉ちゃんたちの軽音部に新入部員が入ってくれば、本当にいいんだけど……」

と今度は姉である唯のことを心配している。

家庭的で優しい憂は、きっと将来いいお嫁さんになるだろう、と猛は心のなかで感心した。

*

猛はその後、校舎の広い中庭に出てみることにした。

するとそこはすでに、元気よく新入生を呼び込む上級生たちと、どの部に青春をかけようかと真剣に考えているらしい新入生たちでごった返していた。

若い女の子たちが集まっているからか、熱気にあふれた空気がみなぎっている。

(若いつて、いいいな……)

猛はそう思いながら、思わず微笑みを浮かべて様々な部活動の勧誘行事を見てまわった。

茶道部は、畳を持ってきてお茶をたて、新入生たちに飲ませているし、手芸部は、小さなマスコット人形を新入生たちに配っている。どこも新入部員の獲得に必死だな……、と猛が考えていると、ふいに後ろから、

「猛ちや〜ん！」

と、聞いたことのあるような、少しくぐもった声が聞こえてきた。そのため、後ろを振り向いた猛は、思わずびっくりして声を上げた。

「うわあっ！」

そこには、よれよれの動物の着ぐるみを着た異様な一団がいて、ドタドタと走りながら猛に向かってきていたのである。

「私たちがだよ、猛ちやん！」

それは唯の声だった。

着ぐるみを着ているメンバーは5人いる。

全員が着ぐるみの頭の被り物を取ると、なかからは軽音部員たちの可愛い顔が次々と現れた。

着ぐるみの動物は、左から梓がブタ、紬がネコ、唯がニワトリ、犬が律、馬が漑だが、どれもはつきり違ってよれよれした着ぐるみであるため、可愛らしさとはあまり縁がない。

「何だ、キミたちか。びっくりしたよ」

と猛が思わず云うと、唯は大きな声で、

「インパクトあるでしょ？」

と笑顔を見せた。

「インパクトあり過ぎだよ」

と猛は苦笑する。

「他とはちよつと変わったことやらないと、目立たないからね〜」
と、律がいたずらっぽく笑った。

「しかし、ホントにびっくりしたよ。インパクトなんかを通り過ぎて、ダイナマイト級だった。そんなことやって、新入生たちがホントに近づいてきてくれるのかい？」

「そりゃあ、バツチリのはずだよ」

と唯が云う。

「ぼくが、びっくりし過ぎなのかな」

「そうなんじゃないですか？」

と梓。

「誰だつて驚くよなあ、こんななの」

と、溼が黒い大きな瞳を瞬く。

すると、唯がニコニコしながら猛の表情を見つめて、

「それにしても、猛ちゃんでも驚くことがあるんだね、ウルトラマン80なのに……」

「わあ〜っ！」

驚いてみんな、唯の口をガバツと押さえこんだ。

「フゲウ……」

唯は瞳を見開いて、びっくりしたように喉の奥でもゴモゴモと。

「ああ驚いた……」

「肝が冷えたつて感じよね」

幸い、他の連中は皆自分たちの部活動のことに必死で、唯の言葉なんか少しも気にかけていないようだった。

そのためギリギリセーフだったようで、軽音部のみんなは思わず安堵の表情でお互いの顔を見交わしたのである。

律が怒って、

『絶対秘密つて云つただろっ！』

と唯の頭をこづくと、唯は、

「すみましえん……」

と小さな声で謝った。

猛の正体はさわ子を含めた軽音部の6人以外には、絶対に秘密という約束なのだ。

3

その後、音楽室に戻ってきた唯たちは、着ぐるみを脱いでくつろいでいた。

今日もまた、紬の持ってきたダージリンの紅茶を飲み、小さなク

ツキーをつまみながらの楽しい雑談の時間なのである。

「ああ、美味し」

と、嬉しそうに律が云った。

「ホントだよな」

と澪も云う。

「着ぐるみ、着てるとちよつと暑かったよね」

と云つて、唯がエへへと笑った。

「それにしても……」

と猛は聞いてみた。

「どうして、新入生の勧誘行事にあんな着ぐるみを着ることにしたんだい？」

「そんなのあたり前じゃん、考えてわからないの？ 猛ちゃん」

と、律がノリノリな調子で云う。

「こういうときは、やっぱりインパクトが第一 だから、思いつきしインパクトのある勧誘方法で、きっちり新入部員ゲットのさ・く・せ・ん！」

チツチツと、指を振る律の言葉に、思わず猛は首をかしげた。

「軽音部なんだから演奏の素晴らしさで勝負するのが、いちばん新入生の心には届くんじゃないかなあ」

「ダメダメ」

と律は首を振る。

「演奏は、体育館で割り当てられた時間以外はできないの！」

「へえ、そうなのかあ」

「とにかく、演奏はそのとき頑張るとして、呼び込みはみんなの度肝を抜くようなことをして、他の部に差をつけたいとね」

と、律は上機嫌である。

「だけどあの着ぐるみは、ちよつと恥ずかしくくないですか？」

と梓がみんなを見まわしながら云った。

「せめて、あんなによれよれでなければいいと思うんですけど……」

「そうだね、あずにゃんの云うとおりだよー！」

と唯は瞳を光らせた。

「もうちよつと、可愛い服とかのほうがいいんじゃない？」

「可愛い服？ たえばどんな？」

「えつと……」

「うーん」

と思わず考え込むメンバーたち。

するとそのとき、

「どうやらお困りのようね！」

と、この軽音部の顧問教師であるさわ子がいきなり音楽室の扉をガラツと開けた。

「あれ、さわちゃん」

とびつくりしたみんなに、

「エッヘン！」

とさわ子は一回咳払いをした。

「私が裁縫得意だから、私のつくった可愛い服を着てみんなで呼び込みするというのはどうかしら？」

さわ子の目は、すでにキラキラと輝いている。

「たとえば、ナース服とか、メイド服とか……」

「それはお断り！」

と、溼があつという間にその意見を却下した。

「そんなあ〜」

うるうるとさわ子は目に涙を浮かべた。

「私、せっかく可愛い服つくれるのに……」

と、口をとがらせてプウツとふくれ面になる。

「何で、私の優しさがこの子たちには伝わらないのかしら……」

「さわ子先生、大丈夫ですか？」

と、猛が慰めようとすると、

「そうだわ！」

と、いきなりさわ子は、猛の存在に今気づいた様子でまた瞳を輝かせた。

「矢的先生、よかつたら執事服とか着てみませんか？」

「え、ぼくが？」

「ええ」

そううなづいて、さわ子は思わずウフフと笑った。

「宇宙人の執事って、きつと映えると思うんですの」

「……………」

「……………」

「……っていうか、かなり面白いよな、それ」

「矢的先生の執事に、私お茶ついでもらいた〜い！」

「いいかもしれないわね」

唯の言葉に紬もそう云って微笑んだ。

「そうよね、みんな、ね、ね？」

さわ子の目が、またいつそう異様に輝いてきた。

「だから、ねえ、矢的先生！ 執事服を……………」

目をランランと輝かせるさわ子に猛は、

「いえ、今は遠慮しときます……………」

と、たじろぎながらもやんわり辞退するのだった。

「そんなあ〜」

と、さわ子があつかりした様子でまた床に座り込む。

「猛ちゃん、執事服似合うと思ったんだけどなあ……………」

と、唯も一緒に残念がった。

「猛ちゃんのことだから、いつか着てくれるよ、きつと」

と律。

「案外恥ずかしがりやだからな、猛ちゃん」

と澪。

「ここには、更衣室がないものね」

と紬。

「今度、つくつちやいませうか？」

と、積極的な梓。

「じゃあ、澪もメイド服着て〜」

と云いだす律の頭を漣はパコツとぶつ叩いた。

「余計なことを云うんじゃない！」

「だって、漣が……」

いつものように明るく平和な光景を繰り広げる軽音部のみんなであつたが、猛はこの地球に迫りくる危機のことをふと考えた。

ウルトラの父は、ウルトラ兄弟を含め、一人でも戦力は欠けてほしくない、とあのとき云つたのだ。

今朝、一般道路でマイナス・エネルギー計が反応してしまつたが、あれはやはり人々の心にマイナスエネルギーがどんどんはびこりつつあるという証なのだろうか……。

「どうしたの？ 猛ちゃん」

気がつくと、唯がそう云つて猛のほうを見つめていた。

「何か、悩んでることがあるんじゃない？」

みんなが、一斉に猛のほうを見る。

猛は、苦笑しながらも小さくうなづいた。

そして、心の奥底ですつと気になっていたことを口にはぼらせた。

「もしも、この街に怪獣が現れたら……、キミたちはどうする？」

第一章 新入部員と着ぐるみ（後書き）

第二章に続きます！

よろしく！

第二章 小さな森と美少女探検隊の結成（前書き）

こんにちは。

猫のことで、ご心配をおかけしてごめんなさい。

猫ちゃんは今、ガンではなかったようで、元気に生きています。

第二話目で〜〜す！

第二章 小さな森と美少女探検隊の結成

第二章 小さな森と美少女探検隊の結成くまたまた新入部員獲得大作戦く

1

航空自衛隊の元エースであったオオヤマは、出勤するとすぐに上司の部屋へと向かった。

上司である防衛部長は、彼の顔を見ると露骨にイヤな顔をする。だが、オオヤマはいつものように、この上司に対してたたくみかけるのであった。

「こないだの件は、副司令官に進言していただけましたか？」
「……………」

防衛部長として任期の長いスギタは、もうけっこうな年齢である。普通ならば、余計なイザコザには首を突っ込まず、何事も穩便にすませることを旨とする男であった。

しかし、オオヤマのせいで近頃は頭を悩ませられることが多いのだ。彼は煙草の吸い殻をひねりつぶしながら、恨みごとでも言いながら彼を見据えた。

「また、その話かね」

「はい。事は早急に対処すべきではないかと思ひまして……………」

「宇宙人が襲来してくるかもしれない、なんて夢物語を副司令官に私が進言できると思うのかね、キミは」

「夢物語ではありません！」

オオヤマは、確固とした意志を持って言った。

「私は、宇宙人の襲撃のために、実際、部下を一人亡くしているのです。何度も申し上げているように、敵は圧倒的な科学力、そ

して明確な殺意を持っています。それに対応できる特殊部隊を創設することを出来るだけ早く行っておかなければ、大変なことになります!」

「……………」
スギタは、そんな彼に対し、失望したように大きくため息をついて見せた。

「もともと、キミは優秀な男だった。パイロットのなかでも、ブルーインパルスに筆頭で選ばれたぐらいだったな。……私は、キミにとっても期待をしていたものだよ、オオヤマ君。　そんなキミが、こんなおかしなことばかり言いだすようになるとはな……」

「……………」
オオヤマは、思わず絶句して、スギタの表情を見つめた。
スギタは、委細構わず言葉を続ける。

「まったく、キミがこんなに頑固で、しかも世迷い事に取り憑かれた輩になりさがらうとは……、昔は考えもつかなかったよ」
「では……………」

と感情を押さえめに彼は云った。

「　どうしても、そのことを副司令官に伝えてはいただけないのでしょうか……………」

「当たり前だ!」

とスギタは激昂して云い放った。

「そんなことをしたら、私の地位が危うくなるだけじゃない!　キミだってタダでは済まないことぐらい、キミにはわからないのかね!　宇宙人の襲来に備えて特殊部隊を創設しろ、だと?!　そんな話は、テレビの特番のなかだけでたくさんだ!」

「……………」
オオヤマは、上司の火のような怒りを受けながら、黙って顔をうつむいていた。

スギタはそれだけ云ってしまうと、次は哀れみを込めたような目で彼を見つめた。

「とにかく、悪いことはいわん。宇宙人の襲撃に備えて特殊部隊をつくるなど、そんなことを実現させようと考えるのは、もうやめたほうがいい。私にとっても、キミにとってもロクなことにはならん考えだ。宇宙人などいないのだよ、オオヤマ君。キミの部下は、宇宙人に殺されたのではない、機体の操作ミスで事故を起こしただけなのだ……」

「しかし、私はこの目で見たのです!」

オオヤマは、割り切れない気持ちでそう云った。

「自分のこの目でハッキリと見たものを、それを否定せよ、とおっしゃるのですか?!」

「世の中、そうしたことが必要なこともあるのだよ」

と、淡々とスギタは云った。

「たとえば、それが本当であったとしても……、そんなことは誰も信じやしない。だから、もう忘れたほうがいいのだ、オオヤマ君」

「……………」

「さあ、もうその話は終わりにしよう。出て行きたまえ」

冷たく云い放つ上司の言葉に、仕方なく彼は頭を下げた。

「……………」

「失礼します」

ガチャ、とオオヤマは、沈んだ気持ちで部屋の扉を開けた。

後ろを振り返ると、上司は自分と眼さえ合わせたくないようであった。つた。

廊下に出て歩きながら、彼は思わずため息をついた。

(誰も信じやしない、か……)

心のなかでそう呟くように云いながら、彼はふとあの矢的という青年のことを思い出した。

何故か、彼なら今の自分の主張を笑ったりせずに聞いてくれそうな気がしたのだ。

オオヤマは、あの青年に宇宙人のことを話そうとしたことを思い出した。

何故、自分はそんなことをしようとしたのだろう……。

(矢的君……)

孤独な今のオオヤマにとっては、あのどこか不思議な青年の温かな心が急に懐かしく感じられたのだった。

彼は、あの矢的という青年ともう一度話をしたい気分になっていた。

*

その数日後

場面は変わり、桜ヶ丘高校の軽音部の部室にて……。

「あゝあゝ！」

「うゝゝん……」

机に突っ伏している律を初めとして、軽音部のメンバーたちは全員ぐったりとして席に座っていた。

実は、新入生の入部希望者が一人も来ないのだ。

着ぐるみ作戦を始めとして様々な手を打ったし、新歓ライブで演奏したU&Iもバッチリの出来だったにもかかわらずである。

「何で、一人も来ないのおゝゝ」

「ホントだよ、どう考えてもおかしいよな……」

律は、ぶつぶつと呟くように云った。

「他の部はけっこう部員が集まってるみたいですよ」

と梓がため息をつく。

すると唯が、

「そうなの？」

と律のほうを見た。

「そうだぞ、たとえば、バスケット部なんかは県大会で優勝しているから、入

部希望者いっぱいいるみたいだし……」

「そうなのか……？　うちは、そんな実績ないな……」
と、澪が自嘲気味につぶやく。

「それだけじゃないですよ！」

と梓は、その不公平さに憤りを感じたように云った。

「ジャズ研にも新入部員がたくさん押しかけてましたよ」

「確かギターのすごく上手い子がいるのよね？」

と紬。

「去年、うちのクラスの純も、カッコイ先輩がいるからって、ジャズ研に入っちゃいましたしね……」

と、梓は顔をうつむけた。

「でもでも、あずにゃんは私達のほうがカッコイって思ってたんだよね？」

という唯の言葉に、

「うっ……」

と、思わず赤くなって言葉に詰まる梓。

「だよなー、私たちの演奏に感動して、目を輝かせながら入部してきてくれたんだし」

律も、唯の言葉に乗っかって悪乗りを始める。

「で、でも二人とも全然ダメダメですぐに幻滅しちゃいました！！」
プイとそっぽを向いて梓は逆襲した。

「何をー！！」

「あずにゃん……シドイ……」

「まあまあ」

抗議の声を上げる律と唯に対して、紬が仲裁に入る。

「大体なあ、我が軽音部にも澪というスーパーアイドルがいるだろ
うっ……！！」

とそのとき律がまるで他の部と張り合うかのように声をあげた。

「ブフッ……！！」

不意をつかれて思わずお茶を吹いてしまう澪。

「おお！　やっぱり澪ちゃんを前面に押し出したほうがいいのかな

?!」

と唯。

「メイド服着せちゃう?」

と紬。

「私は、カツコイイ系の衣装が見てみたいです」

と顔を赤らめる梓に、

「や、やめるー!」

と澪は叫び声を上げた。

そして、しばらくしてみんなの意見が出揃った頃

しばらく目を閉じてしばし考え込んでいた律は、

「やっぱり、話題性かな?」

と、パチツといきなり目を見開いて云い、急に立ち上がった。

「律っちゃん、何か名案が?!」

と声をかける唯。

そして、固唾を飲んで見守る一同。

充分に間を取った後、律は、

「今からみんなで、近所の森に探検に行こうぜ!」

と宣言した。

「え?!」

みんなは思わず驚いた。

「いきなり何云いだすんだよ、律」

と澪が眉を寄せてたしなめた。

「猛ちゃんからあの森には近づかないようにって云われてただろう?」

「そうだから、行くんじゃないか」

と律は云う。

「思い出してみよよ、

一、二、三日前、猛ちゃんが何て云ってたか」

「ん?」

律にうながされ、一同は記憶の糸をたぐって、あのととき猛が云っ

たことをゆっくりと思い出した。

「もしもこの街に怪獣が現れたら……、キミたちはどうする？」
いきなり猛に訊かれて、軽音部メンバーたちは面喰った。

しばらくの沈黙の後、律は少しおそろおそろという感じで、

「出るの？」

と聞いてみた。

「まだ、はっきりとは分からない。そのことについては現在調査中なんだ」

と猛は云った。

「だけど、危険な場所にはなるべく近づかないほうがいいなあ」

「危険な場所って？」

「マイナスエネルギーが充満しているような場所のことだよ」

「そんな場所があるの？」

唯が、丸い目を大きくして云う。

「あるよ、実際」

「たとえば？」

「ぼくがみんなに近づいてほしくないと思うのは……」

と猛は考えながら視線を上に向けた。

「この学校から少し歩いたところにある小さな森とかね。何故だか知らないが、あそこにはマイナスエネルギーがたくさんあるようで、マイナス・エネルギー計がいつもあつちに反応をする」

「……………」

「しかも、その量はけっこう大きい」

「そこに、怪獣がいるってことなの？」

「かもしれないなあ」

「……………」

軽音部メンバーは、その猛の言葉に全員不安げに顔を見合わせたのである。

「ってカンジだったよな……」

と律は、一同に問いかけた。

「なら、もちろんあの森に探検に行くのはやめるんだろっな？ それに、それが部員獲得と何の関係があるんだ？」

「だ〜か〜ら〜！」

と澪の言葉に律はチツチツと指を振った。

「あそこに怪獣がいるんなら、いち早く探検に行つて怪獣を発見し、学校みんなを避難させなきゃだろ？ 特に後輩の新生たちを！」
ウシシ……、という感じに律は笑っている。

「そうだね、律っちゃん！」

と、唯は素直に感心している。

「つまり〜、こうなるわけだ」

と律は部室内の黒板のほうに移動した。

チョークを持って何か言葉を書き始める。

「び、しょう、じょ？ 美少女探検隊？」

澪は、げんそうな顔で律の書いた文字を読んだ。

「そう、名付けて、怪獣を誰よりも先に発見した美少女探検隊作戦
！」

「へ？」

と澪は首をひねる。

「ま〜だ、分かんないの？ 怪獣を発見して学校みんなを救った
勇敢なる美少女探検隊！ 私がその隊長として有名になって、新入
部員をゲットしちゃうつてさ・く・せ・ん！」

「……………」

澪はそのまま固まって絶句している。

「そっか！ あつたまいー、律っちゃん！」

唯はしきりに感心して、律に同調した。

「ではでは、律っちゃん隊長とお、その仲間の唯隊員！」

「はいッ！」

唯は頭に右の手のひらを掲げて兵隊のように敬礼した。

「美少女探検隊、すぐに出動ッ！」

「ラジャーッ！」

律と唯は、早くも美少女探検隊になった様子で、外に出かけようとする。

「危ないぞ！」

澪はそう叫んだ。

「それは止めたほうがいいですよ」

と梓も云った。

「私もそう思うわ、危険よ！」

いつもはおっとりキャラである紬までが、眉を寄せて表情を険しくした。

しかし

「ダイジョブ、ダイジョブ！」

と律はまったく取り合わなかった。

「平気さ！ 私たちにはウルトラマン80という強い味方がいるんだからな！」

「なっ……？！」

と思わず目が点になる澪。

そして唯は、

「そうそう　じゃあ、いっちょ行きますか……、律っちゃん隊長

！」

「しゅっぱーっ！」

「うん」

というと、二人は澪たちが止める間もなく素早く外へと飛び出していった。

「ちよつと待っ……」

「あ……あ……」

と、残された三人は面喰った様子でお互いに顔を見合わせる。

「どうします？」

「どつて……」

梓と紬は途方にくれた顔をして見つめあう。

「仕方ない、猛ちゃんに相談に行こうか？」

「そうですね！」

と、澗の発案に梓はうなづいた。

「きっと、それがいちばんよね」

と、紬も賛同する。

三人は、職員室にいる猛のもとへ行くため、すぐに音楽室を後にした。

第二章 小さな森と美少女探検隊の結成（後書き）

どうでしたか？

皆さん、私もUGM本部も元気なので、ぜひ、どしどしまた感想くださいね。

いつも、皆さんの感想を読むと、元気が出るので。

お待ちしてま〜〜す！

第三章 突然の訪問者と花束（前書き）

今、夜の2時頃ですが、目が覚めちゃったもので、小説をアップしよう

としています。

今回もヨロシク〜！

第三章 突然の訪問者と花束

第三章 突然の訪問者と花束

1

その頃、猛は職員室にある自分の机の上で、怪獣がいるかもしれないと思われる例の森から採取してきた草や石などを、ルーペを使って調査している最中だった。

(やはり、こんなところにも影響が出ている……)

猛はルーペをかざしたまま、思わず眉をひそめた。

マイナスエネルギーの影響で森にあった草は枯れかかっており、石なども少し普通より変色していることが容易に見てとれる。

(もしかしたら、怪獣出現は予想より早いかもしれない……)

猛は、心中胸騒ぎがし始めるのを止めることができなかった。

そのため、思わず猛が考え込んでいると、

「お疲れさまです、矢的先生」

と、さわ子がお茶の入った湯呑みを机の上に置いた。

「ありがとうございます、山中先生」

と、猛が頭を下げると、さわ子は、

「いいえ、どうぞ」

と云ってニッコリ笑う。

職員室のなかでのさわ子の猫かぶりは完璧であり、数人の男性教師がさわ子のことをチラチラと見ている。

だが、音楽室で軽音部の顧問をしているときの素のさわ子を知っている猛は、彼女のそのギャップに妙に複雑な気分にならざるを得なかった。

軽音部以外では、素の自分をひた隠しにしているさわ子の姿を見

ていると、何となく他人事ではないような気分になるのである。

つまり、ウルトラマン80であることを軽音部以外の場所ではひた隠しにしている自分の姿に通じるものがあるような気がしてきてしまうのだ……。

そんなことを猛が考えていると、さわ子は、

「一体、何をしたらっしやるんですか？」

と、猛の机の上を覗き込んできた。

猛はかなり声をひそめて、

『実は、近くの森に怪獣が出るかもしれないので、その調査をしている最中なんです』

と彼女の耳元で云ってみた。

すると、

「ゲッ！」

と思わずさわ子が云う。

その声に驚いた表情の男性教師たち。

少し離れたところで書類を書いていた男性教師が、何事かというような目でこちらを見ているのに気づいたさわ子は、すぐに声をひそめ、

『ちよつと、大丈夫なんですか？ もう、あんな危険な目に遭うのはごめんですよ』

と不安を表情に露わにした。

『まさか、こないだみたいに、生徒たちもまた危険な目に遭うんじゃない……』

そう云いだすさわ子の言葉に思わず猛の脳裏にも、傷つき青ざめた表情で横たわる憂の姿が思い浮かんだ。

しかし、彼はそれを振り切り、さわ子を安心させるように微笑んだ。

「大丈夫です、きっと僕がみんなを守ります……！」

「矢的先生……」

さわ子は、思わず感動したように潤んだ目で猛を見つめる。

そのとき

「矢的先生、お客さんですよ」

と、他の男性教師が猛に声をかけた。

「え？」

猛は思わず立ち上がった。

見ると、職員室の入り口付近にあのオオヤマが立っていた。

彼は、猛を見つけると微笑みながらこっちへゆっくりと歩いてくる。

「すまない、お邪魔だったかな……？」

と冗談っぽく云うオオヤマに対して、さわ子はいきなり慌てだし、

「いいえ、全然そんなんじゃないんですの、オホホホ……」

などと云いながらその場から退散した。

猛は立ち上がり、思わず目を丸くしながら近づいてくるオオヤマに微笑みかけた。

「オオヤマさんが、まさか学校までやってくるとは思わなかったなあ……。一体、どうしたんですか？」

猛は、びっくりしたように云った。

するとオオヤマは、

「いや……、大したことじゃないんだが」

と頭をかく。その後、

「できれば……、ちょっといいかな？」

外へとうながすオオヤマに、

「ええ、いいですよ」

と猛はうなづき、場所を変えることに賛成した。

*

それから、二人はオオヤマの乗ってきた白のセダンを駐めてある
校舎裏の駐車

場へと赴いた。

そしてオオヤマは車の後部座席から花束を取り出し、猛の手へと渡した。

「実は、今朝云っていたハナシヨウプを持って来たんだ」

「え、わざわざそのため……？」

その紫の美しい花を見ながら、猛は怪訝そうな顔をした。

そのときふと猛の心に、地球に来てから初めて知った花言葉が思い浮かんだ。

「忍耐」

「え？」

オオヤマは、少し驚いたような顔をした。

猛は、思わず頭をかいた。

「あ、すみません！ ハナシヨウプの花言葉を突然思い出しちゃって……。失礼ですよね。本当にすみません……」

と猛は謝った。

するとオオヤマは、

「忍耐か……。確かにそうかもしれないな」

と寂しげにつぶやいた。

その横顔に、猛はただならぬものを感じたのだった。

「どうしたんです、何かあったんですか？」

思わず真面目な表情に戻って、猛は訊いてみた。

「実は……」

そう云って、オオヤマは少し逡巡したがついに話し始めた。

「二年前のことだが、私は部下との飛行訓練中に、とても不思議なものを見たんだ」

「不思議なもの？」

「つまり……」

そう云って、オオヤマは空を仰いだ。

「宇宙人の円盤さ」

「え？」

猛は、目を見開いた。

「宇宙人と遭遇したんだ、私は」

「……………」
「そしてその宇宙人は、私の部下の乗った機体に何か光線を浴びせた。すると、その機体は空中で爆破されてしまった」

「……………」
「敵は、明確な殺意と圧倒的な科学力を持っていた。地球人などひとたまりもないほどのね。……私はその力を目の当たりにして、このままでは地球が危ないと考え始めた。今のうちに宇宙人の脅威に備えた特殊部隊を設立しておかなければ、おそらく大変なことになるってね」

オオヤマはそう云うと、寂しそうに微笑んだ。

「しかし、そんなことは私の力では出来そうにない。私の上司に訴えてもみだが、誰からも夢物語として終わらせられてしまう。宇宙人の存在など、誰も信じてくれやしないんだ」

「……………」
「そこまで話したオオヤマは、猛の表情を見て思わず云った。

「すまない、変な話をしてしまったな……………」

そう云う彼の表情からは、

やはり、変に思われただろうか……………？

と心中懸念している様子が猛には見てとれた。

慌てて猛は、

「いえ、オオヤマさんの考えは、まったく正しいと思います」

と同意を示した。

「実は、僕もこの地球には現在、少しずつ危機が迫っているように感じてるんです。そのなかには、宇宙人に対する懸念もありますよ」

「キミも？」

「ええ」

猛は、そううなづくと少し笑顔を見せた。

「ただ、僕は宇宙人ってそういう攻撃的な奴らばかりじゃないと

思っんです。多分、人類の友達になれるような宇宙人もいっぱいいますよ、きつと」

「そうかな？」

「だけど、オオヤマさんは何でそんな話を僕にしてくれるんですか？」

「何故だろう？」

オオヤマは、彼自身も分かりかねている様子で云った。

「自分でもハッキリとはわからないんだが、キミには何か不思議なものを感じたんだ……」

「矢的センス〜ッ！」

そのとき、漣と梓、それに紬が猛に向かって走って来た。

「どうした？」

三人は、オオヤマを見ると軽く会釈し、猛を近くの植え込みのほうへと引つ張っていった。

そして、猛の耳元へこそこそと話す。

『矢的先生、大変ですよ！』

「何が？」

シートと口に指を立てて梓が小さい声で云った。

『律先輩と唯先輩が、怪獣を退治するなんて言っただの森に探検に行っちゃったんです！』

『何とかしてよ、猛ちゃん！』

と漣。

『どうしたらいいの、全然分かんないわ！』

と紬。

「そりゃあ大変だ……！！」

猛は、オオヤマから貰った花束を漣の手に預けた。

「すみませんオオヤマさん。僕はちよつと、急用が出来ましたのでこれで失礼します！」

「矢的君！」

「また、会いましょう！」

猛は血相を変え、すぐに校門を目指して走り去った。

漣、紬、梓の三人も、またオオヤマに会釈すると猛の後を追って行った。

第三章 突然の訪問者と花束（後書き）

矢的先生、頑張れ〜！

ウルトラマンって大変ですね。

いやはや……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1215q/>

地球を守りたい

2011年12月15日03時10分発行